

# 新堀紅泉研究ノート

小野 孝尚

はじめに

- I、出自と風土
- II、創作入門
- III、書簡に見る「木星」及び「黎明」時代
- IV、親友大関五郎からの書簡
- V、稿本概観
- VI、校歌等の作詞
- VII、雨情詩「鹿島囃し」の書簡に見る成立背景
- VIII、紅泉略譜

はじめに

大正時代に地方紙『いはらき』新聞「木星」欄で活躍し、その名を当時の茨城歌壇に轟かせ横瀬夜雨門下四天王の一人として高く評価された新堀紅泉の生涯やその作品はどの様であったか。又、横瀬夜雨や野口雨情や山村暮鳥を始めとした交流や、更には夜雨門下四天王としての大関

五郎や神戸節や森田麦の秋との交友関係についても見て行きたい。

『茨城の文学史』（昭和五十年十月 茨城文化団体連合）の「短歌と俳句」によると「新堀紅泉 本名昌、明治二十二年八月、鹿島郡巴村（現在銚田町）の名門に生まれ、若くして村議、収入役、助役、村長（三期）を歴任、戦後は追放されたが、解除後も何かと公職に就かされた。地方の名望家であり、温厚篤実なる人格者でもあったが、昭和四十年三月急逝した。「木星」では夜雨に師事しながら早くより大関五郎と共に「詩歌」に入り、前田夕暮の指導を受けた。歌は、その人格のようにおだやかで、真面目で、地味な目立たないものが多かった。その作歌量は比較的多かったのに歌集は一冊も残していない。「苦惱者」を通じて山村暮鳥とも親しく、「苦惱者」にも多くの作品を発表した。」とある。

平成十二年六月の土曜日に鹿島郡銚田町（現在は銚田市）の生家を訪ねようとしたが、なかなか見つからずてこずってしまった。県立図書館等で県内の人名辞典や文学関係の人名を調べてもその名前が出てこない。銚田町（現在は銚田市）では先ず図書館を訪ねた。名前を言えば生家はすぐわかるであろうと思っていたがわからず、二階の郷土資料室を見せていただいた。しかしそれらしいことはどこにも載っていなかった。

結局は受けの脇にあった電話帳の新堀の氏名の部分をコピーして新堀の名前の多い鳥栖地区を訪ねた。しかし何軒尋ねてもわからなかった。諦めて車に乗り暫く行くと下富田地区の方が道路脇の広場でゲートポールをされていたので車を降りて聞いてみた。直ぐにわかって「村長の家だよ」「醤油屋だよ」と教えていただいた。私が車に乗り込むと、親切な小柄の男性の方が車の所まで来てくれて詳しく説明してくださった。「しばらく行くと上富田の十字路があり、その左側に店があるのでここで聞きなさい。」と丁寧に教えていただいた。

紅泉の生家は、菅野谷であった。前年の平成十一年には小川町出身の詩人清水橋村について調査のため数回にわたって巴川流域の大和田や下吉影を訪ねており、小川町の図書館で清水橋村の生誕百二十周年を記念した催しを開くことが出来た。

新堀家には突然お伺いしたにもかかわらず、夫人は丁寧に話をしてくださり資料も見せていただいた。ダンボールの箱に入った資料は鉢田町の町史編纂の資料として調査され、整理されていた。概略見せていただき、後日再度見せていただくことにした。

二度目に訪問したのは、お盆も終わった八月十九日であった。今回は特に写真や書簡や履歴に関する資料を写真に撮らせていただいたり、コピーをさせていただいた。中でも大関五郎からの書簡の数は驚く程であり、葉書は約百通を越す数であった。横瀬夜雨、山村暮鳥、野口雨情からの書簡も残されており、その他沢山の手紙類も大切に保管されていた。現在「木屋」の四天王と称された歌人の中で神戸節や森田麦の秋の二人については比較的整理されており、まとめられている。神戸には『筑

東集』（昭和四十五年）があり、昭和五十年には霞ヶ浦の歩崎観音岬に歌碑が建立された。森田については吉田登美穂編による『歌人村長森田麦の秋作品集』（平成五年）が出ており、歌碑も平成四年に竜ヶ崎文化会館前に建立された。この二人については木村修康によっても「ふるさと文庫」『茨城歌人列伝二及び三』（昭和五十六年）の中に詳しく記録されている。大関五郎については上京し、特に中央の詩壇で活躍したことによって、文学辞典等に明記されており、最初に大関の評伝を書いたのが故郷義幹であった。研究者としては故川野辺精がおり、西条和子が調査を進めている。少数数ではあるが、小野孝尚による『詩人・大関五郎―詩の光芒と追想』（平成十五年十一月）がある。

平成十六年九月九日午後、鹿行地区高校訪問の帰りに新堀家を訪ねた。今年台風が多い年で大型の台風が接近中であった。現当主の昌男氏や夫人にお会いすることが出来、思い出話をお聞きすることが出来た。再度雨の日にお伺いさせていただくことにした。未だ田圃の稲刈りは終わっていないとのことであった。今年少し遅れているとのことであった。その後電話で連絡を取りながら日を重ね、天候の様子や都合を見ており、十一月十五日にお伺いすることにした。

十一月十五日は天気予報通りに雨となった。昌男氏も夫人も快く迎えていただいた。応接間には暖房も用意していただき、恐縮してしまっていた夫人の「大きな雨になりました。」この言葉に特別な温かさが感じられた。この日は、裏にある旧宅も見せていただいた。旧宅の一階には凝った茶室もあり、ここは水戸の偕楽園にある好文亭をそっくり真似て造ったものであるという。二階は大きく三つに分かれており、日当たりのよい

廊下部分は広くとり、健康管理のためのヨガや日光浴等に使用していた。床の間のある部屋とその隣は、書庫になっており、沢山の蔵書が所狭しと書棚に詰まっていた。蔵書の範囲は広く、文学・宗教・経済・思想と広範囲に亘っており今後の精査が待たれる所である。

新堀紅泉については、昭和四十年四月四日の『週刊てんおん』に故木戸清平が追悼文を載せ、稲葉義司郎遺稿集の『白明歌集』（昭和五十年）の中には「新堀紅泉をおもう」が載り、小野勝美は「解釈」（昭和五十一年九月）に「山村暮鳥と鹿島の歌人新堀紅泉―暮鳥未発表書簡―」を発表している。鉾田町史編纂では中根誠が「鉾田の文学」の報告及び「鉾田の文学」資料展目録を作成しており、その中で新堀紅泉を取り上げている。

新堀は生前一本として取りまとめた著作が無かったためにその文学的業績が一般に知られることが少なかった。晩年の紅泉自らの「歌歴」の終行には「未だ著書なし」と書かれており、読むもの、心に寂しさが残るものがある。かつてはその名を「木星」夜雨門下の四天王の一人として名声を得、水戸時代の暮鳥を中心とした文学仲間黎明会での活躍とその仲間たちとの交流も多く、大関五郎とは無二の親友であった。このように当時は紅泉の名を知る人も多かったが、作品が手に入らない現状では益々忘れ去られてしまうことであろう。初出の雑誌や当時の新聞を閲覧することは、研究者であっても難しいことである。新堀紅泉の文学的な業績については集大成されていないというのが実状である。本稿に於いてさ、やかではあるが、新堀紅泉関係の残された資料を中心に紹介しながら見て行き、出来得れば本稿が新堀紅泉再評価の試みに繋がれば幸いである。

## I、出自と風土

紅泉自身の自筆履歴書によると本名は昌。明治二十二年八月二日に茨城県鹿島郡巴村大字菅野谷一〇六〇番地（現在は鉾田市菅野谷一〇六〇番地）に父亀吉、母みわの長男として生まれた。母のみわは、現在のかすみがうら市下稲吉の本陣木村弥平の娘で、大変に教養ある女性であった。当時としては珍しく、能書家でもあった。紅泉の文学的な素養は母方から受け継いだものである。紅泉の生まれた日は、夏の暑い日であった。新堀家は藤原氏の系統で、先祖は吉影城主から分家したと云われる。その時、鳥の巢・菅野谷・上富田・手賀の四ヶ所にそれぞれ分かれたと伝えられている。菅野谷新堀家の初代の当主は与左衛門と称し、事後与左衛門を世襲し、昌の代で二十六代目となる。近在きつての素封家であった。初代は次男の吉兵衛を延享元年（一七四四）に分家させている。生家に残された紅泉の教育関係の賞状は次のようである。

修業証書 庄兵衛孫

尋常小学校一学年ノ課程ヲ修業 明治三十年三月 巴第二尋常小学校

同 二学年 明治三十一年三月

同 三学年 明治三十二年三月

卒業証書

尋常小学校四カ年ノ教科ヲ卒業 明治三十三年三月 巴第二尋常小学校

賞状

第四学年 試業成績優等ナルヲ賞ス 明治三十三年三月

修業証書

高等小学校一学年ノ課程ヲ修業 明治三十四年三月 沼前尋常高等小学校

同 二学年 明治三十五年三月

同 三学年 明治三十六年三月 白河高等小学校

賞状

学業優等ナリ依テ賞品ヲ与ヘテ之ヲ表彰ス 明治三十六年三月

講習証明書

中学講義第一学年ヲ講習セリ 明治三十八年五月 帝国中学会

修業証書

本会第二学期ヲ修業 明治三十九年九月 大日本国民中学会

卒業証書

全学科ヲ卒業セリ 明治四十三年二月 日本文章学院

証

高等国民教育科講義録ニ就キ全科ヲ修業 明治四十三年二月 早稲田大学

紅泉は尋常小学校でも高等小学校でも優等生であったことが証明される。明治三十六年三月、白川村立白河高等小学校を卒業した後に水戸の

私塾に通い漢籍を学んだこともあった。若くして家業を継ぎ、その人柄は清廉で慈愛に満ち清雅であった。

紅泉の生家の東側には巴川が流れ、舟運の盛んな当時には賑わいをみせた大和田の河岸に近い。生家周辺は稲作と畑作が中心の純農村地帯であり、自然が豊かな地域で巴川の水流は北浦に注いでいる。北浦に流入する巴川は『新編常陸国誌』によると屈折が多く、巴のような形をして流れていたのが巴川と称したといひ、また茨城、鹿島、行方の三郡を三巴になって流れていたからともいわれる。慶安三年（一六五〇）頃から交通運輸に利用されはじめた。『小川町史』（昭和五十七年）によると「水戸藩では那珂川を下って、那珂湊の手前から涸沼川に入り、涸沼湖畔の海老沢河岸を開いた。ここから小川・下吉影の両河岸へ陸送して再び船に積み、園部川・巴川を下って霞が浦・北浦に出て、更に利根川を関宿までさかのぼり、江戸川へ移って江戸深川の河岸へついた。その後東北の諸藩もこの内陸航路を利用するようになった。小川及び下吉影は河岸を中心になぎわいを増し、昼夜港町の様相を深めていった。」とある。

「小川町のあゆみ」（井坂教）にも「下吉影・大和田の河岸には常時荷積人夫や馬子達が集まっていた、飲食店・居酒屋・料亭・旅館等が繁盛し、特に大和田の宿からは夜毎に三味線の音が流れて、情緒豊かな港町風情をただよわせていた」ようである。銚田町は昭和三十年三月十五日、旧銚田町に秋津村、巴村、徳宿村、新宮村を加えた五か町村の合併によって誕生し、平成十七年十月十一日に銚田町、大洋村、旭村が合併して銚田町となった。

## Ⅱ、創作入門

紅泉の書いた最も古いと思われる草稿によると、ペンネーム等について始めは「菅城の里 巴涯隠士」と書き、次に「巴村菅城の里 新堀楓溪」とある。即ち次の様な制作年月日不明の草稿が残されている。

落花の宵	巴村菅城の里	新堀楓溪
別れの四辻	菅城の里	新堀楓溪
俳句 五句	茨城溪相	
まこと儂なの	巴村菅城の里	新堀楓溪
		(蝶子の君)

次の草稿も年月日は不明であるが「茨城県鹿島郡巴村菅城の里 新堀紫泉」とある。題名は書かれていない。本文の始めに「我輩一段の修養を要する学生時代にあたり、読書の必要は敢えて之を賢するの要なけむ。」とある。これによって初期時代には「紫泉」のペンネームを使用していたことも明らかとなるであろう。

これらの初期の草稿の内容から見ると、始めは月並みの文語調による散文を書いていた。即ち「落花の宵」の冒頭部分は「雲白く薄れながれり、照りもせず曇りもやらぬ月影に、やつれはてたる己が姿を描きつゝ、我れやうらぶれの身を倚せて、今宵物思ふ窓の辺り、白き花片の一葩二葩、淋しく散りて春の夜やいたくも更けたりな。我はよもすがら月下に泣かんか。」とある。「別れの四辻」は学校からの下校時の仲良しの友との四辻での別れについて書いている。最後を「やがて二人共黄金の波間

へと消えて行くのである。」と実り豊かな秋の農村風景を比喩表現の手法を上手に用いながら快く結んでいる。同じ所に綴じられている一枚の用紙に書かれた俳句五句からは、紅泉の初期の文学創作の始めは俳句であったことも証明されるものである。

案山子にも馴染みて来るや稲雀
青空を見ている山の夕紅葉
鶯も来て鳴け梅の帰り咲き
それ程の中に子も見ず池の鴛鴦
松のみが通の葉や枯野原

名前については、用紙の右下に行書で丁寧な書かれており「茨城県鹿島郡巴村字菅野谷 新」までは読めるがその後は破れており判読が不能である。恐らくは本名の新堀昌としたものであろうと推測される。

次の「まこと儂なの」についても制作年月は不明である。「吁、知らざりしよ。我はつゆ知らざりしよ。嘗つて父母と父母とに許されたる、未来の良人ある御身とは……。(中略) 君よ！ 暫し聞かれ給へ。名も成らず今又恋に破れん。(中略) おおそれよ里は桃散る夕なりし、願ひし上京のかなはぬものから、若き血潮の湧き返り、只管に芸術の愛慕止み難くて、深夜密かに家を脱したりしき。漸くして三とせを紅塵の巷に雄々しくも力に余る奮闘の鍵揮ひたりしも、希みの敵や強よかりけん。我れの脳や弱かりけん。あわれ敗残の汚名を受けぬ。今更に我れは故郷に魂をつつまよすがとなる。流れなかれてうらぶれの身をこの里に挽

きたりしは、それよ御身も知らむ、(後略)」と書かれているが文章も硬く、漢語調による表現は時代的な特徴と云える表現方法である。女性の名前は「蝶子の君」と書かれている。

草稿及び日本文学学院講習生となり添削指導を受けた直筆原稿による資料が数編残されているので、次に年代順に並べ、題名と評価点数等も記録したい。

明治四十一年晩春稿	散歩の帰り	丸に点三
明治四十一年六月	日記の一節	佳作
八月	野良返り	巴涯隠士
明治四十一年八月(推定)	無題(太陽は)	六十点(佳作) (芳子さん)
明治四十一年八月(推定)	蟋蟀	六十五点
仲秋稿	無題(先刻この縁先へ)	
十一月	哀れな老人	六十一點
明治四十二年一月稿	日記の中より	五十一點
明治四十二年壹月	見送り	六十三点(佳作) (従姉の死)
明治四十二年四月三日	我が日記の序文	五十八点 (文末に紅泉生)
明治四十二年四月三日	日記の中	六十點
明治四十二年四月十八日	ブチの心	五十點

明治四十二年四月二十一日	春雨の窓	六十點
明治四十二年四月稿	我が悲しみ	五十九點
明治四十二年五月十四日	晔	六十點
明治四十二年五月十六日	熱い涙	六十點(佳作)
不明	動く心	六十二點

明治四十三年二月二日午後發

明治四十二年度 日本文学学院卒業試験答案

第七回卒業試験

- 第一、作法
- 第二、国語、漢文
- 第三、文法、修辭学
- 第四、文章史
- 第五、添削
- 第六、文題

八題から三題を選ぶ問題があり、紅泉は次の三つを選んだ。

卒業後の取るべき道

予が近状を報ずる書(書簡文)

路を歩きながら

卒業試験成績表によると、学科の平均点数は八十八点・創作は八十点・平均八十四点で及第となっている。卒業生待遇規定によると「卒業試験二及第セル者ヲ日本文学学院院友ト称ス」とあり、新潮社からの出版書籍を特価で購入でき「院友ハ新文壇ニ投稿スルコトヲ得」とある。

明治四十三年六月二十一日	新農夫日記	院友	八十点
明治四十三年七月（推定）	頼白	院友	五十八点
明治四十三年九月六日受付	今昔	院友	六十五点（秋さん）
明治四十三年九月	随感録	新堀紅泉	
明治四十三年九月（推定）	疑	院友	六十六点
明治四十三年十月九日記	孟秋雜感	新堀紅泉	
明治四十三年十月（推定）	白銀のピン	院友	八十点
明治四十四年三月	俳句 四篇	新堀紅泉	
不明	沈丁花	紅泉子	
不明	我が近來	新堀紅泉	
不明	鼎六月号妄評	くれない生	
不明	歌稿（六九一）甲	新堀紅泉	

草稿の中のテーマは家族のことや女性のことが書かれているが、大きなテーマは自分の身の振り方・処し方である。詳しくは「新農夫日記」や「我が近來」等に記録されているので、前者から部分的に引用しながら見ていきたい。「祖父と継祖母、父と母、姉と義兄。これ等の人の間に起こる新奇思想の衝突及び誤解より出でたる争論。私は恵ふいふ事実を日々目撃している。」と書き、続けて祖父は年を取るほど妙に片意地になってきており、祖父の命令は継祖母の意中より出ていることもある。負けじ魂の勝った母は非常にこれを憎んだ。姉は私情に駆られた小さな

不満を時々父に訴える。小さな義兄は自分の思うことを口には出せない。神経家の父は一々これ等のことに心を悩ました。紛争している家庭を円満に導くにはどうしたら良いかについて紅泉の心は始終往來していた。

次に「勉強は農閑を利用して出来る。学校と教師これ必ずしも偉人となるに唯一の機関ではない。天才は造られず生まれるといふではないか。自分はこれから農業をやる、家事にも努める。両親の心も満足させる。併して尚倦まざる努力を続けよう。（中略）然し全く反対な心になる事があつた。私は近頃田舎に甘ずる心が生じた。（中略）妻が何だ。子が何だ。両親も家庭も自己の為には、凡て犠牲にして然るべきものではないか。かばかりの係累に尊き生涯を束縛されて、男児の面目が即邊にあらう。起たふ。奮然起たふ。放浪も艱難も厭はない束の間なりとも変つた生活を試みよふ。新しき生活！新しき刺激！五ヶ年三ヶ年の学資は喧嘩をしても財産の一部から割いて見せる。放縦な学生生活！楽しい学窓の勉強！恵ふした強い反抗心も、病床にある父が呻吟の声には忽ちめげた。我と我が弱き心を憤りもした。果ない境遇を悲しみもした。煩悶又煩悶！」と書いている。

短歌の創作については、明治四十三年、二十二歳の時に「白菊会」に入会して金子薫園の指導を受け、翌年の七月からは前田夕暮の白日社に入会し『詩歌』創刊からの同人となっている。年月不明の「歌稿（六九一）甲」はこの時代の草稿であると考えられる。

こ、で新堀紅泉の『詩歌』での著作について見ることにしたい。

大正元年十二月一月(二卷十二号)	白日报社詠草
大正二年四月(三卷四号)	詩歌詠草
五月	同
十月	同
十二月	同
大正三年六月(四卷六号)	同
大正四年四月(五卷四号)	同
六月	十四人集
七月	十一人集
八月	十四人集
九月	十八人集
十月	十五人集
十一月	田園小景(新堀昌)
十二月	遠晴るる村
大正五年一月(六卷一号)	二十三人集
二月	霜夜ごもり
四月	うすみぞれ
五月	十九人集
九月	木原
十月	茗荷
十一月	秋声抄
大正六年四月(七卷四号)	炭小舎

六月	野芹
八月	苗木植
十月	あぜみち
十一月	身ごもる(十首)
大正七年三月(八卷三号)	悲歌(十二首)
四月	妻を懐ふ歌(十三首)

以上であるが、大正七年三月の「悲歌」を中心とした妻の死については、後に詳しく述べたい。

その後の短歌制作活動については大正八年頃からは公務多忙のため作歌からは遠ざかったが、昭和三年四月の第二期の『詩歌』には復帰した。一方地元では新聞『いはらき』『木星』の同人となって活躍した。

大正七年一月六日水戸市の偕楽園の好文亭に於いて「木星記念集会」が開られた。前年の暮の三十日の『いはらき』には「木星の集り開く」とあり、予定では夜雨は滝子夫人と共に出席するようであった。一月六日午前十時からとあり、会費は三十銭の弁当代であった。同じころ紅葉には夜雨から会への誘いの葉書が届いていた。しかし夜雨の意に反し、結果的にはこの会を通して茨城の詩歌壇の人々の新しい文学活動が展開されて行くことになる。

## Ⅲ、書簡に見る「木星」及び「黎明」時代

次に新堀紅泉宛の書簡を中心にして、当時の文学的な交流の実態を見ていきたい。これ等の資料によって茨城の近代詩歌壇の動向等が初めて明らかとなることもある。特に横瀬夜雨・山村暮鳥・大関五郎等からの貴重な葉書も現存しているので紹介したい。

新堀紅泉の文学的な友人との交流の始めは大関五郎との交友であろうと推測されるので、まずは始めにベースとして大関五郎から新堀紅泉宛の葉書を見て行くことにしたい。

平成十六年夏、茨城大学の佐々木靖章教授は地方紙『いはらき』新聞の明治・大正時代の八十六日分を茨城県立歴史館に寄贈された。その新聞の記事の中の大正二年二月二日付けについて佐々木教授は「二月九日午前十時より弘道館にいはらき詩社の懇話会を開きて一日の歓を盡と欲す／横瀬夜雨氏出席、諸君の来会を俟つ／一、会費金二十銭、名刺と共に受付に渡されたし／一、来会者は八日夜までなるべく編集局内富岡如夢に宛て一報されん事を望む」という記事が見える。夜雨が講師として呼ばれている。詠草者には新堀紅泉の名が見え、大関独浪とあるのは詩人の大関五郎かと思われる。」と書かれている。大変に貴重な資料であり『いはらき』新聞の古い時代のもは県内にはほとんど残されてはいない。戦争で新聞社が被災したことが原因である。

現在、大関五郎の新堀紅泉宛書簡の最もふるいものは、大正三年三月十八日付けの葉書である。「鹿島郡巴村菅野谷新堀昌様とあり、上大田小沼宅にて、十七日大関とある。旭村の上大田の小沼宅は妻みわの実家

であり、二人はよく里帰りをしていたようである。大関夫妻の出会いには五郎が当時の早稲田主計学校を卒業して水戸に帰り、みわは大成裁縫女学校を卒業した直後であった。当時女学校に入るのは、良家の子女が多かったようで、大成女学校は大変に家庭的であったようである。二人の入籍は大正五年四月二十八日であったが、二人の間には子供が出来ないことが悩みの種であったようである。葉書の内容は「今日やつてまゐりました。茶屋と舞台との空気にひたつて居候。頭にはほんとに淋しいです。其内ぜひあがるつもり。お子さんのお風邪は如何。奥様によろしくねがひます。」とあり、大関は未だ新堀を訪ねてはいない。三月二十五日付けの上大田からの葉書には「御愛児御死去の由奥様おなげき一人のこと、お察しいたします。今度はあがれるかどうかわかりません。あさつて頃帰ろうと思ひますから水戸へぜひおいで下さいまし。まつてます。けふの暖ですこと。ルバイヤットをよんでをります。御浪！今回も又訪ねることはなかった。ペンネームは草書で御浪とある。四月六日付けで伊香保松葉屋からの葉書には「おたより只今拝見。原稿は来月号に廻します。あと十五六日ここに居ります。支社はぜひこしらへ度いものです。そのうち水戸にいらして下さいませ。」原稿は雑誌『詩歌』に送る歌稿であろう。支社もやはり詩歌の支部のことと推察される。四月二十二日には、同じく伊香保松葉屋から「お葉書こちらで今日拝見。支社をこしらへるは大賛成！一人足りないって困つたもんです。私の友人にも入つてる者もあつたのでしたがやめてしまひました。西茨城の岩間の武田紫城君は入るでせう。僕の最も親しい仲ですから。入つた方の名を知らせてくださいませ。支社が出来たら五月中旬に大洗か水

戸で小集をやるうじやありませんか。」四月二十三日 伊香保「おいでくだすつたつて失礼しました。来月になつたら是非おいでくださいまし。武田は少しまつてくれつていつています。」四月二十七日 伊香保にて「過日のお話の白日社支社の小生加入の儀はしばらく見合すべく候。御承知下され度候。二十六日」五月三日には「みそかに帰り支社の件は如何相成り候哉。本日武田君参り候。近日是非お出掛けくだされ度候。五月号の御歌悲しく拝見いたし候。奥様によろしく願上候 御浪」五月十二日には水戸御浪の名前で新堀紅泉様とあり「木星には規程なんてないでせう。夜雨さん宛てに原稿をおだしになるか、社の方へおだしになれば好いです。常総でも鬼百合姫百合てえのをやりだしましたからお出しになつたら好いでせう。やつぱり夜雨さまが選者です。木星の白明君が詩歌へ入つても好いと言つてきました。支社発会式は何時の頃ですか。」当時の状況を知る上で大変に貴重な資料である。紅泉や御郎のペンネームが書かれている。白明は稲葉白明のことであり、大関が雑誌『詩歌』に稲葉を誘つたことが明らかであろう。以下葉書の発信地については、特別の断りが無い限り大関の自宅である水戸市新鳥見町九百三十四番地（現在は水戸市泉町二丁目二番地）からのものである。五月十七日には「お葉書拝見。近くいらつしやる由楽しみにまつてをり候。銀行に出てをり平常の日は留守に候。一日土曜日の夕方着の御予定にてお出で下され度候。」五月二十八日「お葉書拝見いたしました。忙しいので御無礼ばかり。一昨日大洗へ子供をつれて遊んできました。支社の集まりには木星の寧楽更衣君も出ると言つてをります。時日は来月中旬の日曜日にし度いと思ひます。場所は遊神閣の淋しい室が好いでせう。又い

づれ。六月十一日 大関御浪の名前で「会は七月になつたはうが私にも結構です。なるべく第二日曜日になりたいものです。支社の事は全部御引受してもよろしいですが、とに角会合のときに皆様の御方案できめたいと思ひます。梅雨期に入りますから御体御大事に。」続いて七月十二日には水戸水府座前にて大関五郎として「御手紙拝見いたしました。一時二時までの夜業が珍しくありませんので遂失礼いたしました。集会はいつ頃やませうか。今月の第二日曜日頃にやり度いと思ひますが如何でせう。皆様に御相談下さいまし。」八月十一日には「御無沙汰いたしました。お変わりもございませんか。八月号にお見えになりませんのでなんだか淋しゆうございました。別便で「県声」御送りいたしましたから御入会下さい。御都合で支社を置いて下さりませんか。十六日午前九時から清香亭で涼しい会合をやるうと思ひます。会費は都合で五十銭にしました。是非出て下さい。おまち申します。外の諸兄（白日社支社の）にもよろしくおつたへ下さいませ。（雪石君は詩歌の愛読者です）」八月二十三日 世の助から紅泉へ「今度も御面会が出来なかつて、実は口惜しゆう存じます。銀行へ御出で下されば好いものを三十日の正午頃には上大田の小沼へ参つて居る筈是非鹿眠武田島諸君と御同行下さい。都合で広浦へ舟を浮べ度いと思ひます。二十九日か三十日に水戸出發九月一日かへる筈に候。」とある。葉書でのペンネームとしては「御浪・世の助」位であり「独浪」の名前は見られない。推測ではあるが、草書体で名前が書かれていた為に紙上では「御」を「独」に誤読したのかも知れない。大関の新堀紅泉宛の書簡の書風も三度程変わつていて判読するのが非常に難しいものもある。特に初期の横瀬夜雨からの影響の書体は難しく、

逆に山村暮鳥の影響を受けた文字には素直さや優しさが滲み出ている。

続いて大関の大正四年の新堀宛の葉書を見ると一月二十三日「今月の三十一日に木星の会合をやる事になりました。是非御出席をお待ち申します。詳しい事は明日から新聞に出ますからそれで御承知下さひまし。共選会もある事ですし久しぶりの会合に沢山集まる事と思ひます。どうぞよろしく。」二月二十七日「御無沙汰いたし候。来月の第一日曜日頃お出かけになつては如何。詩歌にお歌のなきをさびしく感じ候。三月五日「お葉書拝見いたしました。お変わりもない由誠に結構に存じます。支社を捨てるといふことは実に残念です。及ばずながらお引受けしてもよろしゅうございます。今月の中旬に出京しやうと思つてをります。その時は夕暮様にもお目にかゝつてこやうと思つてをります。その前にあなたに拝見にかゝつていろくお話し度いと思ひます。木星同人の冷花君も白日社に入つたやうですね。今度の日曜には岩間の紫城君も来るかも知れませんが。是非いらして下さい。三月十五日「稲葉君は入つて呉れました。紫城は駄目。哲学的なんて大きなことばかりいつて、支社は四月からお引き受けいたします。いよく二十日に出京します。「筑波郡大曾根小学校の宇佐美柳雨」君へもお葉書願ひます。横浜の玉章君も大いに喜んで葉書をよこしました。多田君は目下小話に努力しているさうです。哀花君は今晩来るでせう。」三月二十五日（推定）「二十二日に大久保に行きました。詩歌の原稿を印刷所に持つて行くので先生といつしよに東京印刷会社に行つて日比谷を歩きました。「紅泉さんは凡五六の人ですか」なんて聞かれました。前田さんの机の上には例のゴムの樹が青い色をして有りました。木星の話やら園部君の話なんか出ました。水

戸にはずつと前に行つたことがあると言つて居られました。短歌号にお出しになつた由楽しんでまつて居ります。その間におでかけになりませんか。二十二日 五郎」三月二十五日「支社の現在会員の姓名をお知らせ下さいませ。住所もお書添へねがひ度うございます。佐治君には未度会ひません。今夜は来る度ろうと思ひます。宇佐美君は大いにやるつて言つてをります。神戸さんと海老原さんにハガキ出して見やうと思ひますが、住所は存じありませんか。丸の中に五」四月十三日「東照宮の祭礼にお出かけになつて如何。なかなか町々の張込が激しいから面白いものが出来るかも知れませんが。岩間の武田君も来る筈。白明さんも来るかも知れませんが。奥様もおつれになつたら如いでせう。妻よりも宜しくと申居候。」四月二十二日「東京は如何でした。此夏の祭にはお待ちしていただくに武田君は来ませんでした。常磐神社の祭の頃小集をやりたと思ひます。如何でせう。水戸 五郎」四月二十六日「お葉書拝見。お忙しいんですね。菜の花のなかに唄つて見度うございます。常盤神社の祭の頃お出かけ下さいませんか。集まりをやつてみたいと思ひます。ほかの人々にも相談してみませう。五月五日「野稔拝見。今日もまたわが家の森の杉木立汝れに抱かれてものを思はむを幾度か低唱しぜんに涙ぐむのをとどむる事ができませんでした。集まりのことは当分中止にしやうと思ひます。夏になつて大洗あたりでやつてみたいと思つてをります。ぢやおたつしやに。いつか。六月五日「東京はどうでした。お帰りにと思つて待つていたんでしたに。そのうち是非お訪ねしやうとおもひます。身体軀がいけなくつて遊んでいきますから。」六月十三日「旧の節句には是非あがつて柏餅の御馳走にでもなりたいのですが、行かれさうもあり

ません。七月の検査が了つてからゆつくりあがります。木星のお歌面白く拝見いたしました。前の座には子供芝居がありますし、常設活動もラッパを吹いてをります。六月二十六日「七月の中旬から八月の初めにかけて平磯に避暑しやうと思ひます。八月になつたら一たん水戸に戻り再び妻の里に涼を納れやうと思つてをります。その時はお目にかゝれる事と信じてをります。梅雨晴れの午。七月十二日「お葉書拝見 けふ検査で兵役を免除されました。弱い男のこゝろもちお察し下されまし。八月といはずに近いうちに上ろうとおもひます。更衣さんも来てをります。奥様によろしくお伝へ下さい。」八月三日「如何お暮ですか。十日位のつもりで福島の方へ避暑に参ります。あつちからお便りはあげるつもりです。上大田には旧盆の頃参ります。御健康を祈ります。」八月十日「今日こゝに参りました。夕暮さんには未だお目にかゝりません。二週間ほど居ります。旧の盆には是非お伺ひいたします。八月十七日 伊香保にて「木星に沢山見せて下さつてありが度う存じました。おなつかしく存じます。妊み妻の一首。私には特に激しくびびきました。明后日上大田に参ります。約十日間滞在のつもり。今度にはお邪魔にあがります。八月二十一日「昨日こちらに参りました。少し長く居るつもりでおります。いつ頃お訪ねしたらよろしいでせうか一寸お知らせ下さいまし。子生局区上大田小沼方」八月二十五日「お葉書拝見。盆中にはあがれず参れませんが。そのうちには必ず参上いたします。」九月五日「水戸にも珍しく西洋の大物の活動が来るさうです。クオヴァアズといふんです。酒沼には今度は非遊びたいとおもひます。哀花君がさきほどかへりました。お出かけ下さい。おまち申します。九月二十三日「御返事のびのびになつ

て申訳ありません。お尋ねの「毎日」はもつて居りませんけれど木星の人迄は一人別の評ではないとの事です。(私も見ないで了ひました。)全体をほめて書いてあつたさうです。月見には徒歩余りですけど行きませぬ。柿の頃になつたらあがりませぬ。短歌号のお歌を期待されます。神戸さんよろしくねがひます。十月五日「ひどい風邪でした。お障りはありませんでしたか。十日程前から佐藤君が私のところに寄寓することになりました。柿の頃と思つたがどうですか。文展におでかけになりますか。十月初旬(推定)「産道拝見。道問へば……は珍しいお作と思ひました。此頃の私の周囲はほんとに暗い空気に満ちてをります。来月の中頃にお訪ねします。少し長く上大田に泊る筈ですから度々お目にかゝれると信じてをります。十月二十一日「御手紙拝見しました。またお月見がきましたね。となりの勝手で餅をついて居ります。共進会にお出でになりますか。神戸さんも稲葉君も武田君も来るさうです。集まつて揃餅でも齧ぢろふぢやありませんか。」十月二十七日「御病氣ですか。木星の会合日は早速お出で下さい。待つてをります。紫岩君やその他白日社の方にもお誘ひ下されば幸ひでございます。」十一月四日「節君も紫城君も白明君も帰つて了つた後はほんとに淋しい。今日まではあなたが来ると思つて待つて居りました。田園小景拝見いたしました。湖南君があなたに会う度加つて居ります。出してはいかがが、お忙しいですか。奥様によろしく。」十一月二十日「お忙しいのですか。毎日のやうにお噂してをります。湖南君は本日出京しました。姫ム、登樹、美、まつ、君等が昨夜集まりました。来月の初めの頃上大田に一寸参ろうと思つてをります。都合でその節お目にかかり度く思ひます。」十一月二十五日「折

角のお招きなれどその頃には参りかね候。年賀にもならば或はお伺ひ出来得べくと存ぜられ候。時候節柄御身大切にねがひ候。「十二月十五日」またぞろ風邪にやられて閉口して居ります。外にも出たいし咽喉は痛むし。新年になつたらお目にかゝりませふ。そちらへは数日のやうですからお出かけ下さい。」十二月三十一日「二日ほどお迎へに行つて居てけふ戻りました。たふくお訪ねする事が出来ずに了ひました。喪のお正月にお出かけ下さいませんか。奥様よろしく。」

大正五年の葉書は一月一日「賀正 水戸水府座前 大関五郎」二月三日「昨日公園に遊びました。今年は誠に気持好く梅が咲きました。この分ならば今月の二十日頃は丁度よからうと思はれます。今月の詩歌はまだ来ませんがどうしたのでせふ。三月四日「紅梅がふくらみました。今月は詩歌におみえになりませんので寂しゆふ感じます。旧の三月節句に上大田に行かうと思つてをります。その時必ず訪ねいたしませふ。三月十一日「そろそろ梅も散ります。短歌号を楽しんでをります。雨雀氏の講演会にはぜひお出かけ下さい。来月初旬との事です。御体御大切に。奥様によろしく。」四月十七日「昨日千波を一周しました。久しぶりで生きる心がいたしました。十九日には是非出席下さい。神戸さんは来られますか。ワシリーエロシエンコ。秋田雨雀、深澤白人、竹久夢二の諸氏が来られます。詳しい事はその節に。お待ち申してをります。」四月二十日「どんな御都合でしたか。会はずりませんでしたがお目にかゝれぬのが残念です。今夕飯を了へた所、これから活動写真をみます。五郎 水戸へ来て、どれ程おまちしたかわかりません。逢はれないことを非常に残念に思つています。どんなに残念でしたか。二十日夕

節」六月一日「お葉書拝見いたし嬉しく思ひました。役場におつとめの由誠に結構に存じます。お宅へもぜひお伺ひし度いのですが四日に行つて六日に帰水八日に塩原へ行く事になりましたので今度は残念ながら駄目になりました。いづれ真夏の頃に御厄介になり度いと思つてをります。奥様にもどうぞよろしく。」七月七日「どうかなすつたんですか。御返事がないので心配してをります。何んだか変てこに寒いぢやありませんか。頭が痛んで患つて居ます。来月になつたら早く転地し度いと思つてをります。近頃は何するの嫌やでござろしてをります。写真機を買はふともおもつてをります。七月七日」八月十日「これからがまた暑いのにくるしめらる事だろふと思ひます。先週はお出かけになる処だつたさうでほんとに残念でございます。旧盆にはまた上大田に参りますから御都合がおよろしいかつたら是非あちらへお出で下さいませんか。お待ち申します。奥様にどうぞよろしく。上大田へは新の十二日か十三日に行つて七日ほどをります。」八月十四日上大田小沼方「お葉書拝見いたしました。お忙しい由誠に残念でございます。私は都合で本日まで考え度と思つてをります。二十五日頃までは上大田にをります。御都合で御出で下さいませ。暁子の住所は東茨城郡小松村猿田千代子。」八月二十三日「たふとふお目にかゝれませんでした。去る二十日に少し都合がありましたので帰宅いたしました。お暇をみて是非こちらへお出かけ下さいませ。」九月五日「お葉書拝見いたしました。それは誠に残念でした。大会には是非お集り下さい。此頃は毎日草むしりをやつたり、となりの二つになる女の子を遊ばせてやつたり、オルガンをひいたりして暮らしてをります。『ゆく水の心ひとはしらくわが心きみしらくなく

ゆく水は水、君は君」九月二十五日茨城・北條「昨日大宮から稲葉さんのお宅へ廻つて泊まりました。今日雨のなかを暮れてゆく山の町のはたごやに着きました。」十一月十八日「お葉書拝見いたしました。今度のお天気もなんだかあてにはなりませんね。秋深ひ野の道の朝夕どんなにか詩情をそゝられる事でせふ。立存式当日に丁度一年ぶりで木星の小集をいたします。何とか御都合なすつて是非お出席下さい。」十一月十六日「ますますおたつしやでつけこうでございます。今度お天気がつくやうでしたら暇を見てお出かけ下さい。私も今年の内にはお伺ひし度いと思つてはをります。秋の雨舎庫の前にもおもうふ君をしのべばしずかなりけり」

大正六年の葉書は一月二十三日「非常に寒くなりました。お変もありませんか。青年会のお出でになるとおもつてたいへんにお待ちしました。神戸君も猿田女史も来て、小生は風邪がやつとぬけてきました。此前浜中蓮君に一寸会ひました。「茨城書評」のために力を貸してやつて下さい。お子さんはまだですか。神戸君のところでは男の子の由。羨まじき限です。おからだ御大切に。奥様によろしく。」二月二十二日「よく御無沙汰致しました。お許し下さい。お暇はいかがですか。ほこり度うめはだいなしです。お出かけ下さい。私はやつぱり葉と緑をさる事ができずにをります。三月の下旬に東京に遊ぶつもりでをります。奥さまによろしく。」三月三十日（推定）「なかなかお会ひ出来ないのが残念でございます。奥様はどうなすつたのですか。私田舎へ行き度ひとおもひながらなか／＼出られません。いろ／＼な話もたまつてをります。近い内に是非お目にかゝり度ふございます。神戸氏が四月は筆ると

申されました。五月二十二日「この二三日の陽気にはだいぶへこたれました。小集の事はどんなお考へですか。私は今度海岸へ三年位の予定で転地します。まだはつきりはしません。磯浜か平磯のうちです。みつしり丈夫になり度いもんです。詩歌へ猿田千代君が入り度いといつていましたからあなたもすゝめてみて下さい。五月十七日「お葉書有が度うございました。写真はとうにやめて了りました。近況はオルガンに夢中になつてをります。節句には一寸上大田に行き度ひと思つてをります。そちらへもあがり度うございます。別便で出た雑誌お目にかけます。御受納下さい。筑波山に登り度いと思つてをります。奥様にくれぐれもよろしく。」六月二十二日「此の天候でむしやくしやして仕方がありません。今度いよく磯浜町へ転地いたします。畑のなかの一軒家ですがごく新しいのと静かなのが気に入りました。引越しは来月一日頃になりませう。是非お遊びにお出かけ下さい。奥様にどうぞよろしく。七月二日

磯浜旭町 ヨリキ前「昨日ここへ来ました。ゆつくり保養するつもりです。ここで小集をやつたらどうせう。私からも出しますが社友にあなたからも相談して見て下さいませんか。いづれゆつくり。」七月十二日「いそはま ヨリキ前「お葉書拝見致しました。今日の暑い事ぐつたりして了つて何も手につきません。小集は八月になつてからが好いでせうね。とに角お暇の時に一晚泊り位でお出かけ下さいませんか。いろいろお話がしたいとおもひます。」八月十八日磯浜にて「海岸に住んでは晴れた日の方が好いやうです。雨もうんと降れば好い気持ですが、晴れもせず降りもせずのはうんざりします。小集はとても駄目でせうか。八月もなかばをすぎました。お目にかゝり度いとおもひます。」九月九日

「いつぞやはほんとに残念でした。返事を呉れたのは浜中蓮氏と大鳥居氏の二人でした。あの翌日稲葉君が突然友人三人と訪ねてくれました。一晚泊つていろいろ話したり考えを言ったりしました。丁度かつおが沢山とれた宿で皆んな大変な喜びでした。いろいろ都合のため宿の住居を引払ひ先日帰水いたしました。雷神社の祭礼の頃奥様をおつれ下さい。」  
 九月二十五日「昨日雨のなかを筑波に登り、雨引へ廻つて帰つてきました。横根の先生にたのまれたのですが立太子式当日に「いはらき」へあなたの歌を発表し度いから四十首ほど送つてもらひ度ひとの事でした。どうぞ御寄稿を願ひます。」十月二日「大した荒れでした。お宅はいかがでした。私どもではさしたる損害もありませぬ。台風お見舞いまで。」十月十五日表書きは小松原暁子・山並みと日立鉦山の煙りのスケッチあり「小松原女史のところへおしかけて、はつたけをとりました。」「けふは楽しく、松原の間にて過ごしました。多くはあなた様のお噂いたしながら。みわ子さんもお妹さんも、その他四人。都合七人。暁子」十一月十四日「今月の二十四日は小生の誕生日にあたりますので心へだてのな人の集りをやる筈です。あなたの御出でを非常に希望します。奥御懐妊の由うらやましくてたまりません。」

大正七年一月一日「健康と幸福をいのる」一月三日「六日はぜひ御出席下さい。神戸君は来るといつてきました。盛んにやりたいとおもひます。一月七日新堀おつきさん宛 水戸万梅にて紅泉「いろはにはほへどまだ春浅し。昔なぢみの私より(?) 一月七日新堀つき子様」一月六日夜同人拜「酔ざめ悲哀を感じて 神戸節 一月六日夜ふけて 横瀬夜雨 夜明けまで駄弁る 斎藤勇 悪筆を恥ぢつゝ、佐藤博 謹賀新

年 栗原真平 もう十二時です 稲葉白明 おしやくのまぼろしを思ひつゝ、赤地秋華 肉と酒のうずまきのなかに(石川弥重吉)「一月七日新堀昌様つき様 万梅の宵 みんな「亭では酒のむおくさま子をうむ 五郎 知らぬを奥様どこに有 袖 知らぬが仏、お、もてだ 節 保証す 稲葉」二月六日「お丈夫の由何よりです。私も今年は風邪を引けません。昨夜も久しく逢はない友に驚ろかれました。旧の正月がきますね。お子さんたちはなにをして居られますか。集りの時の写真は未だ届きませんか。とうに出来たのですが。安岡氏も今忙しいさうですからさういひませう。」三月十八日「雨あがりの土の色をなつかしみながら会ひにきた母と今朝は話をしました。お子さんも皆さんも御丈夫ですか。二十一日には尋ねきていただき好くおもひます。いろいろお話もたまつています。皆さん待っています。」三月三十日「火事のお見舞感謝いたします。あのことがあつたために久しく逢はなかつたいろいろな友に会へました。もうすぐ桜が咲きますね。ご自愛ねがひます。」四月十五日 十四日夜「今日は非常に心待ちしていたんです。花岡さんにも会へました。近くお目にかかり度いとおもつています。石川君もそれを非常に待っています。」六月四日「旭川は道路のはばが広ひ街です。花輪屋と常陸屋といふ家で飲んでいます。」六月九日 ムロラン「北海道のさくらんぼまつかな寂しいさくらんぼ 五郎 川崎生止松 藤井夕星 石川北男 藤井寂雪 よし川静光<sup>よ</sup>」七月七日「今月のお歌心寂しく拝見いたしました。近頃私はほんとに丈夫になりました。十日から海岸へ参ります。是非お出かけかけ下さい。」七月十日「暑いが御丈夫でせう。いまから大貫のウメバラ別荘へ行きます。日曜に是非お出かけ下

さい。柳橋君もいつしよです。」九月十二日「御無沙汰いたしました。すつかり秋ですね。近頃ちつともお作を発表なさらないんですね。永き沈黙ののちの力作を期待されます。今月の二十四日（秋季皇霊祭）に黎明会の小集を開きます。是非今度はお出かけ下さい。」九月十四日 水戸市鳥見町 黎明会 大関五郎の印「今朝お手紙落手しました。残念にもお歌は創刊号にはまにあひません。もう植字にかゝつていますから。とに角お預かりしてをきます。夜雨氏から何んとかいつてゆきませんでしたが。ひねくれたけちな根性をもっているのはほと／＼呆れて了りました。御健康をいのります。」九月二十八日「ひどい風でした。あの日集つた者はごく少ですが夜にかけて痛飲しました。あなたの所へ送るべき宅の葉書の事も忘れたほどです。是非近い内にお会ひしたうございます。仙台から集まりに加わつた者が二人ありました。」十月三日「山村氏が咯血してから寂しくてたまりません。何事も手につかずほんやりした日を送っています。「苦惱者」は届きましたか。御都合で同人費を来る十日頃までに御送り下されば次号の印刷に非常に具合よくゆきます。」十一月初旬（推定）「寒い風 冬の風 なんといふひきしまつた音でせう。 風は草木にささやいた が生れました。祝を十六日の夕からやります。都合して是非出て下さいますやう。山村氏はその翌日転地する筈です。集るのはごくうちわの者だけです。」十一月二十四日「その後はいかがですか。私もあの日からわるくなつたきり、今日まで自分もねむる事さへ叶わず苦しんでいます。一時は死んでしまふのぢやあないかと思ひましたる山村さんや石川さんのあついなさげに生きています。どうぞしつかりしてはやくよくなつて下さい。」十二月一日（推定）「そ

の後はいかがですか。私は昨日から起きられるやうになりました。未だ普通の着物は着付られませんが。よくよく痩せ細つて了りました。寂しい。五郎 一日あさ」十二月十六日「寂しいおたより拝見しました。すぐに返事とおもひながらなにかと忙しくのびのびになりました。子供の出来ないのが私達の運命なのでせう。寂しいけれど悲しいけれどそのこゝとにちつとたへませう。別便で詩稿をお届けします。二月号へのせまから原稿紙へ書きなほして御送り下さい。今年ものこり少なになりました。とても今年はお目にかゝれぬでせう。お正月にはぜひゆつくりお出かけ下さい。私はまだ服薬しています。」十二月二十六日「写真がやうやく出来ました。別便で御送りしました。皆様の御病氣、私たちも遠くで心配してをります。早くみんなが健康にならねば困ります。一月にはぜひお遊びにお出かけ下さい。初旬に佐治君が鳥渡帰水する筈です。けさは子供のやうに雪をよろこびました。御自愛御努力ねがひます。」

大正八年一月一日「よろこびあれ 五郎」一月二十日「なんといふ寒さでせう。ふやけた奴等は一人ものこらず殺してやるといふやうな風の音。ものすごい風の音。痛快な風の音。二日には大宝へお出でになれますか。私は山村氏からも行つたはうがよいといつてきましたから日帰りに出かけやうと思ひます。あなたも何んとか御都合なすつてどうですか。もし御都合がよければ一日の日に私の家へおいで下さい。私達はどんな者でも愛することが出来るその大きさに生きやうではありませんか。」三月六日「けふのあたゝかいこと。座つていても汗がでるくらいでした。御丈夫ですか。しばらくお目にかゝりませんか。木星の集はまつたくくだらぬものでした。近頃お作はないのですか。四月号へはぜひみせてい

ただきたいと思ひます。それに会計の方が貧弱で困っています。御都合で少しまとめて送ってくださいますまいか。今月の十二日にタツ子の祝儀がありますのでごたごたしています。」三月二十四日「御無沙汰しました。苦惱者の四号は休刊しました。あまりにがさついてきたので今度からみつしりしたものを出す準備と思ひきつて一ヶ月休むことにしました。物質でもかなり苦しめられています。七号からは純然たる詩の冊子として同人組織にします。同人は一ヶ月二円以上の金を出すこと。寄稿は詩に限ること。五月号の原稿は四月五日までに必ず黎明会へお送り下さい。」四月八日黎明会「苦惱者五月号への詩稿は本月八日いつばいに到着いたすやうお送りねがひます。四月五日」四月十一日「どこがわるいのですか。氣候が悪いから心配いす。どうぞ大切にして下さい。大きな沈黙を破つて貴兄の詩が生まれる日を期待いたします。自分たちは本当の人間だ。本当の人間でありたい。沈黙の貴兄に祝福あれ。」五月十七日 差し出し名無し「御無沙汰しました。六月七日はお逢ひ出来るかと思ひます。義 われときて遊べや親のない雀を思ひだされて親と遊んでいる小雀の声をしみじみときいています。五郎 朝火鉢をかこんでお山登りの話やら大室のおやちの話やら。」六月十三日「からだはどうですか。はやく健康になつて下さい。此間はまつたく顔色がわるかつた。はやく丈夫になつて下さい。十月頃是非歌集をお出しになるやうおすすめます。そのうち小生もお伺ひしますが、そちらからもお出かけ下さい。」六月十五日「神経衰弱とは貧弱すぎるやまひにかゝりましたね。この陽気ではどんなにかいけないでせう。大切にして下さい。桜咲く日にお訪ねしやうと思ひながらたうとうはたされずにしまひまし

た。近くお会ひしたいと存じます。おく様にくれぐれもよろしく願ひます。」七月十五日(推定)「今日はひどく荒れます。奥様が御からだがいけない由どうしたのでせう。よく養生なさるよう祈ります。自分は昨日東京から戻りました。近いうちに是非お逢ひしたいと思ひます。笠間の花火の頃お出かけになれませんか。この頃なら丁度い、都合です。何しろ奥様の弱いはいけません。くれぐれも大切になさるよう。十五日夕。」八月十一日(推定)「子の日の原を歩つたのがもう一年になりますね。お子さんもあなたも御大事ですか。今日は庭の松へかなかながきて鳴きました。月見の前作に山村さんと広浦へ舟をうかべる筈です。おひまをみてお出かけになりませんか。」十月三日「夜をいましてる拍子木の音がきこえます。四人の友が帰つたあとのしづけさをよろこんでいます。奥様はその后如何ですか。貴兄はすっかり健康でせうね。近くお出かけになれませんか。久しぶりで逢ひたい。十日すぎに平井吉野両君たちもくる筈です。」十月十二日「俺はいま少し酔っている。それで兄に逢いたい。それは勿論酔はずともだ。奥さんの体も心配だが逢いたい。平井君と柳橋君がきています。二十日頃までに西條、林、青木君たちが来る筈だ。君も来ることを待つ。十七日頃に。」十一月二十三日「いいお天気になりました。お体は如何ですか。奥様も。歌集の方はどうになりましたか。自分はいよいよ十二月五日に出京いたします。今度は東京でおめにかかりませう。夜雨氏からの申出に依り同氏と握手しました。十一月二十三日」十二月二十五日 東京市外池袋一〇三七 「御変りないでせうね。奥さんもお子さんも。自分は生れてはじめての借家住居も馴れてやつと落ちつきました。出京以来風邪で困りましたがもう大丈夫

です。その後貴方の歌集の仕事はどうなりましたか。来春早々御上京なさるやうお待ちいたしてをります。前田氏には明后日逢ひます。その事に就いてもいろいろ相談いたしませう。御自愛ねがひます。」

大正九年一月八日 東京にて「おハガキ拝受。暇があつたらお出かけなさいませんか。歌集の仕事はいまからやらぬととても四月頃に出版することは出来ません。それに近頃は非常に印刷の方が高いし(紙は勿論)しますからずいぶん手廻しをよくせぬと駄目です。それに歌集はいまは売れぬ時代です。うんと安く作つて非売品にした方がいいかと思ひます。」四月十九日「どうかなさいましたか。毎日、毎日、今日か今日かと思つてお待ちしています。さくらの花は末ですが、街路樹の芽ぶく日になりました。御都合では是非お出かけ下さい。昨日前田氏を訪問しました。大へん元氣です。」六月八日 東京市外池袋一〇三七「すつかり夏になりました。その後御元氣ですか。自分は丈夫ですが此頃はろくな仕事もせずにあります。この秋からみつしりした仕事をするつもりでいます。自分は今度偶然の機会から常総新聞の「彗星」を世話することになりました。お力添へをねがひます。歌がありでしたら自分へお届け下さいませんか。同紙も御承知の通り新活字になつてたいへん氣持がよくになりました。」八月十五日 池袋にて「郊外も秋になりました。毎晩こほろぎが鳴いています。今日はいへん烈しい風が吹いています。先日は水戸でおめにかかれなかつたのを非常に残念に思ひました。旧盆の十四日に一泊かけて大宝へ行くつもりでをります。お暇になりましたら東京へお出かけ下さいまし。奥様へよろしく。」八月二十七日 池袋にて「益々御元氣のことと思ひます。今度十月から詩の雑誌「生命」を出します。

尊兄の御都合で二人でやりたいと思ひます。お書きになつた詩がありましたらお届け下さい。当分八頁位のもので非買でやるつもりです。」十月二十三日 東京郊外にて「お便り拝受。今度の風邪は本当に油断が出来ません。お大切にねがひます。東京は大変な騒ぎです。自分は外出さへ控へめにしています。少し暖かになつてからお出かけ下さい。実に危険ですから。自分は久しぶりで歌を書きました。これから木屋でだんだんに発表します。彗星へも原稿を届けてあります。」十一月一日「大関五郎第一詩集愛の風景の祝賀会の通知 十一月六日午後六時 万世橋ミカド 発起人柳橋好雄 山村暮鳥 青木茂 西條八十 佐藤松夫 百田宗治」十一月九日 東京池袋「拝啓 十一日に水戸へ行きます。おめにかかれたら幸です。十二日の午后までいます。雑誌は出しました。今日はその第二を編集してをります。いろいろお話いたしたく存じます。」

大正十一年一月一日「祖母の喪中葉書」

大正十二年十一月八日 取手町新道 中屋方「また冬の息子がしのんで来ました。お達者でお暮しのこと、思ひます。いつぞやはお見舞有がたふございました。私は旅にありましたので、体だけは何んでもなくをります。住居を先月から表記の所に移しました。こゝ、二三年こゝで生活するつもりでをります。六日」とある。

以上が大関五郎の「木屋」及び『黎明』時代の大正時代を中心とした葉書等の紹介である。

次に横瀬夜雨からの葉書は次の様である。

大正六年十二月二十五日「おしつまり候。便秘がこじれて大なんぎに

をり候。一月六日には木星の会をやる積り故、水戸まで御足旁願上候。君に惚れてる連中は沢山あるのだからこのたびは顔を見せてやらなくちやと存候。如何。小松原（猿田）の連中もでる筈。十二月二十四日

大正七年五月五日 雨の朝 虎「前田夕暮君が黎明会の為に来るとは夢にも分からなかつた。木星が主となつて歓迎会を開かうと動いたが面目無い気がする。黎明会の創立には初めから何の挨拶も預からなかつた私だから。大関君の考へ一つで木星を解散する。私はBの為に三日間の紙面を割いたけれど大関が何の為にBの為に働くのか不思議である。如何思しめし候哉。其後歌如何。原稿が大分焼けたろうから少々下さい。」

大正八年五月六日 横瀬夜雨 神戸節 石井嫌 来栖孝 山内秋男  
山本孝 笠間ニテ「六人は化かされて獲へりぬらし井筒屋の三階に座し狐にまぢりぬ 誰か知るわれら六人はかさま野やとうかの初ねこを見んとは」

大正十年十一月五日「お葉書拝見致 先便にはまだでしたが、代価も不明故お知らせしなかつたが、壹冊貳円五十銭（税八銭）です。早速お送りする筈候へど、御不ようの方にお入用で無いのに「友人の義務」だらうと背負ひこむのも御迷惑と存じ候につき、一応貴意を得候。稲葉ははじめ二十冊といつたのを寂しく生きてのやうにせおひこんでは困るだらうと申せしたため四冊に致し、神戸も四冊に候。あともあるさうだがプロバガンダはあまり成功しない。二冊位で如何。十一月いつか 虎寿」とある。

山村暮鳥からの葉書は次の様である。

大正七年三月三十一日「棟一つで無事。早速の御見舞あつく御礼申上候。そのうちにお目にかかりませう。水戸にて 山村生」五月六日「新聞で巴村の大火を知つた。どうしました。無事であることを祈つている。

ああ無事であつてほしい！ 大関五郎 山村暮鳥 六日昼」八月十三日「皆様御無事、結構に候。私、病氣にて海岸にありしが妻、俄かに産気づき忽々としてかへり申候。大騒ぎに候。お目にかゝりたいと大関君等とよく話しをり申候。そのうちに月見にゆくべく候。 水戸市田見小路 山村生」十一月十四日「温い巢をもとめての出立まぎわに、一家をあげての感冒、それやこれやで度々のおたよりも御無沙汰のみ何卒御察し御許しくだされまし。御詩うれしく拝見せり。お目にかゝり度し。

水戸市田見小路 山村生」十一月二十三日「御病氣の由、そんなことではないかと心配いたしをり候。早く御快癒を祈る。大関君では五郎君、さくちゃん、たつちゃん 枕を並べて寝てをり、病院のごとくに候。自分も毎日来て見てをり候。五郎君就中重く候。然し御心配御無用。大関方にて 山村生」

大正八年一月五日「あなたと御一家の上に祝福豊かなれと祈り上げます。一月 北條にて 山村生」七月十八日「小さな巢をみつけたから、移りました。あなたも大分よいさうな、私も同様です。この夏は鉄のやうになりたい思ひます。玲子（六つ）と毎日海辺を散歩しています。しみじみとした人生です。二人ぎりです。おひまをみて是非おいでください。しんみりお話ししたいとおもひます。木の下かなんかで。 大貫町 前田伴之助方 山村生」九月五日「謹んでおくやみを申し上げます。あなたはつづいておたつしやですか。ほんとにお気をつけてください。もう

残暑ですが、なかなか酷しゅうございます。私はびんびんしています。

大貫町前田方 山村生「十一月二十四日」御ぶさたばかりしています。その後はいかがですか。お大事にしてください。歌集をおだしになるよし、結構と思ひます。序を承知いたしました。山村生「十二月十六日」「苦惱者のあなたの詩をよんで自分は泣きました。しみじみとあなた達のおくつている日々がおもはれます。歌集の「野草」はどんなはこびになつてゐるのです。初雪の朝 山村生」

大正十年一月一日「年頭にあたつて謹んで天よりの祝福の貴下及び御家族の上にいよいよ豊かならんことを祈り上げます。大正十年一月元旦 茨城県磯浜町鬼坊裏 山村暮鳥 東京市外池袋八六六 鉄の靴会 発起人代表 花岡謙二」

大正十一年一月一日「年頭にあたつて謹んで天よりの祝福の、貴下及び御家族の上にいよいよ豊かならんことを祈り上げます。大正十一年一月元旦 茨城県磯浜町鬼坊裏 山村暮鳥」

大正十二年十月十七日「この間はおたづねくだされ、ひさしぶりであれしかつた。だが、おかへりになつてから、また赤いものを少し吐いてしまひました。すぐよくなりませう。その折おはなしのあつた木炭、ぜひ十俵ほどお送りくださいませんか。ずっと正月頃までは助かります。まきもお願ひでさたらありがたひ。イソハマにて 暮鳥生」とある。

次に神戸節からの葉書の中から参考になる所を全体及び部分的な事柄を引用転載したい。神戸節からの初めての葉書は大正四年八月一日付けで新治郡美並村の住所となつてゐる。「先日お手紙拝見。私の木星に書

いたものは少々終わりの方がしりきりとんぼの形になつてゐます。あの後まだあつたのが、夜雨氏が削つてしまつのです。また歌稿を送つておきました。御批評を乞ひたく思ひます。互いに堅い握手を交はしながら一歩一歩力強く歩ませう。海老原黒田両君とも稲敷郡伊崎村下須田です。黒田君は今、日光入湯元の方へ行つていられます。水戸の大関君に御紹介願ひたいものです。―暑い日がまた照り出して来ました。そのうちまたいつれさよなら。同年十一月二日「啓只今水戸から帰つた所です。君の御出を鶴首してまつていたのでしたが遂御出がなくて非常に残念でした。水戸では木星の会へ都合上出られませんが、懇親会だけはまいました。富岡大関の二氏その他から非常な歓待にあつかつて感謝しています。かへすかえすも君の御出水なきことが残念でたまりません。いつまた御逢ひ出来ることでしょうか。」

大正五年一月十日「その後御無沙汰に流れ居り候。毎日西風が吹いて寒さいちぢるしく籠城いたし居り候。御可わりもなく御勉強のこと、存候。小生も無事勉強いたし居り候。貴方の歌木星で拝見いたし力強い歩みを続け居らるゝ貴兄をうらやましく思ひ候。冬日雑歌について痛棒を食らはされたく候。大関君の歌には賑やかな気分が流れてゐると思ひ居り候。小生のいつも寂しすぎるものと反対なやうな心持ちいたされ候。夜雨氏の「死のよろこび」も読み候。どうも私等の行き方とは大へん異り居るやう思はれ候。単に歌の可否などよりも夜雨氏の心かなしさいたましさは真に御同情にたへぬもの有之候。只今白秋氏の雲母集玩味いたし居り候。廻るかなるところに澄み入つてゐる白秋氏の詩境真に驚くべきもの有之候。味はいども味はいども味はいつきず候。時には御たより下され

たく、正月にでも相成らば御たつねいたす様含も有之べく思ひ居り候。水戸へもまいりたく思ひつ居候。いつれそのうちまた申上ぐべく先は。早々」四月二十四日「御葉書拝見いたし候。水戸行きはあまりに無意味なのにあきれ申候。音楽会は露語とイスベント語にてやりしもの少しもわからず困り候。秋田雨雀氏の講演、拙つくて聞いたやうな心地いたさず、夢二氏に至つては猶更にて候べき。何としても兄に逢はれざりしが残念にて候。大関君のところへ二泊厚きもてなしを受けてまいり感謝いたし居り候。農家だんだん忙しく相成候。主人公としての御生活お察し申上候。小生も久しぶりにて今日桑畑を耕し候。腰のあたり痛くて早く床に入りこの葉書認め居り候。近きうち御来訪下されずや。おまち申上候。お出掛けの節は、日取り前以てお知らせおき下されたく候。詩歌ありがたくお送り申上候。アララギ（二首）御覧下されたく候。」

三月五日「四五日来流行の風邪に犯され臥床引きこもり居り候。歌など到底出来ず申困却いたし居り候。兄の御歌今日木星にて拝見いたし候。「おのおの」に「雪催ひ」等感銘不浅存じ候。ともどもに努力いたすべく候。頃日夜雨氏より書信あり、「木星は小林渡辺の二人を引っぱりこんで評論を載せることに致す」由にて小生にも一周一日だけ書くやうに申越され候へども、到底書け不申困却いたし居り候。兄の評論拝見いたしたきものにて候。詩歌ありがたく存じ候。アララギ如何にて候や。詩歌二月号またまた御拝借いたしたきものにて候。アララギ二月号近々差し上げ可申候。只今少々発汗、頭いたくたえられず候。御免上候。五月十三日「御出になるかと思つて毎日おまちしていました。御都合おわるかつた事ですか。養蚕がだんだん忙しくなつて来ます。この間の「朝明」評拝見い

たしました。温健な論評が私に多大の興味と刺激とを与えて下さつたひとを謝します。森田といふ人の私の歌についての評、私も何とか書いてみたいと思はないでもありませんが黙します。只今非常に作歌が壮快でならない時です。御消息おまちします。」

大正六年二月十八日「木星の原稿回送いたし候。前の分は森田君の方より参るべく候。春暖やうやくいたる。御病氣如何にて候や。精々御養生の程祈上候。詩歌十二月お借下されずや。一月号森田君より送られたり。アララギ十一月御読みなら御送り願上候。右のみ存候。七月二日「啓、御無音謝上候。梅雨明けて炎熱一時に加はりたへがたきもの有之候。如何御過に遊候や。木星の原稿貴兄最初に加評せられしものやうやく小生加筆の上夜雨氏に返送いたし候。別封は橘君よりまいりしもの。貴兄の方まいるべきものと存回送いたし候に小生目下種々忙事有之。細評いたしがたきにつき、貴兄御加評の上、今一応小生の方へおまわし下され度願上候。近況御洩らし下され度候。敬具」

大正七年一月八日「先日失礼。おねむりをさますのをおそれてそのままに失礼してしまへ候。あしからず願上候。ただただ御逢ひしたことをよろこび居り候。今後もよろしく願上候。こちらの方へも時々御出かけ下されたく候。」一月十六日「十三日つぎ子様御死去の報に接し私は非常なおどろきと悲しみの情にうたれてしばらくは物を言はれませんでした。妻途と共に語りあつては貴兄のおなげきの程をお察し申上げたのでした。今日悲しき御便りを拝見しまして猶さらに悲しみをふたたびしております。万梅の夜、互いに寄せ書きを書きあつた時、二日の後にかうした悲しみを持たうとは誰しも予測されなかつたことでせう。私が青

年大会の時出水して、産期近い妻を思つては心急いで落ちつきを得られなつたことを私は知つて居ます。子を抱いて悲しみ悼むんで居られる貴兄の風貌を思ひ浮かべては私は形容されない心持になつて居ります。妻は今日御葉書を拝見して涙を流して居たのです。二人して謹んで哀悼の情を申述べます。」一月二十日「お歌拝見涙をなくしてはよむべくもあらず、貴兄のお心の程お察し申上候。来る日のいつかはわれも行くものをしばらくしのべひとり居りとも 何といふ悲しきお歌にやるただただ涙を流し居候。哀悼の歌木星に寄せおき候。」六月五日「御無沙汰いたしました。今度村政に尽力いたされる由。遙るかに御健在を祈つて居ります。御訪ね下さるかと思つておまちしたのですが、遂御出がなくて残念でなりません。小生も只今のところ養蚕で非常に忙殺されて居ります。三四日のうちにはすつかりあがつてしまふのですが、そのうちが可成りの苦痛です。アララギの原稿をつくるために二夜ばかり遂に徹夜しました。昼はとても落ちついて推敲などしている余暇がなくて、苦ししい思ひをして勉強しています。兄のこの間の木星の歌拝見いたしました。非常にいい歌があつたと思ひます。しかしあまりに散文的ではないかと思ふ節があつたと思ひます。事象の内核に触れていながらそれを表現する時、それが散文的であるため、歌としての効果が幾分減殺されてはいはしないかと思ひました。一々歌について申し上げたいのですが、いづれ後日申上げることいたします。いづれそのうち。」七月二十八日「御無沙汰いたしました。非常な暑さですが、別にお変わりもありませんか。村政事務御多忙なことせう。私は夏瘦せもしないで丈夫です。来る本月三十一日大宝へまいるつもりですが、貴兄御都合よろしかつた

ら御出掛なさつたら如何です。森田君も来られるかも知れぬとの事です。私は三十一日土浦から筑鉄で北條まで、あれから自転車走らせるつもりです。」

白明・稲葉義司郎からの初めての葉書は大正五年一月二日付けの「謹みて新年を迎奉る」の年賀状である。以下大正七年の主な四通を見ることにしたい。五月三十一日大村局区中上野「この度は突然参上いろいろ御厄介に相成り嬉しく存上げ候。あれからちよつと小川へ寄り、すぐ高浜から筑波まで一とびに飛んでまいり候が、其処より一里半を歩いて七時頃無事帰宅仕り候。雨の音を聞き乍らのね物語、いつまでも忘れまじ候。」八月二十二日 二十一日稲葉白明「昨日午后から大関君と筑波へ登りました。暑つくつてかなりひどい目にあひました。二人とも下駄ばき、それにしても大関君がよく元気でのぼつたと感心してをります。」十月二十一日真壁郡上野村稲葉白明「い、お月さまが出ました。筑波へはまだお出かけになりませんか。今月の末に水戸の五郎さんが、東京からのかへりに寄るといつて来ましたから、その頃は如何ですか。けうは私の村がお祭です。私は今独歩の「運命論者」読み了つたところです。十月二十日夜」十二月二十日稲葉義司郎「本当に寒くなつてまひりました。到頭筑波へは来られませんでしたね。あた、かくなつたらお出かけ下さい。詩歌が廃刊したさうですね。ごたごたした理屈屋ばかりの今の歌壇にはい、皮肉だと、大関君がいつて来ました。もう二年も遠ざかつてる私には別に悲しいことでもい、ません。さういへば、大関君が「寂しく生きて」といふ歌集を来春四月に出すさうですね。私達は君のため

に喜んでおあげませう。また。」とある。

最後に歌人で女性記者として活躍した小松原暁子から新堀紅泉宛の葉書を紹介したい。小松原暁子（ぎょうこ）は明治二十三（一八九〇）年に小松村、現在の東茨城郡城里町上入野に生れた。本名は猿田ちよ。明治四十年（一九〇七）年三月に水戸高等女学校を卒業。その後日本女子大学に入学し、中退して郷里に戻った。この頃であろうと推測されるが、この度大成女子高等学校『なでしこ会会員名簿』によって大成裁縫女学校前身の裁縫塾に通っていたことが明らかとなった。その後小学校の教員となった。傍ら小松原暁子のペンネームで歌人としても活躍した。当時の『いはらき』新聞の横瀬夜雨選「木星」欄にも熱心に投稿していた。

最初の葉書は大正五年七月三十日の日付で、暁子と署名があり「暑中御うかがひ 私の最も敬慕する、紅泉新堀様、いかがお過ごし遊ばされますか。暫く木星にお歌を拝しませんが、どうぞお見せ下さいませ。私はあなたのお歌に深い、深い、共鳴を与へられてをります。技巧の勝つた大関さんのよりも、鋭さを持った神戸さんのよりもすべてのものに愛を持った、おとなしい、そして真実なお歌に意中（ひ）きつけられてをります。私はけふまで、この一片の書を認めますのにいくらほど躊躇したでせう。」

大正五年九月二十六日、東茨城郡小松村猿田千代子とあり「お葉書ありが度う存じました。雨晴れていよ／＼、気澄み渡るやうな感じがいたします。いよ／＼寂しい時が来ました。巴川とか申さるゝ流れに添うふた、美しい自然に包まれていらすあなた様には、この情／＼静な秋が、

どんなにか深い詩情をめぐんでくれる事で御座いませう。どうぞまたおなつかしいお歌を拝見させて頂きます。この夏のお歌うれしく拝見いたしました。誰とて歌について指導してくれる者のない私には、あなた様の御歌を拝見する事が無上のよるこびなので御座います。先達の甘言苦語に対して神戸さんより「あなたがたの歩み方と違ふから」といふ様なお申越がありました。全く悪るかつたと思つてをります。一昨日クロオバが来ました。私は知らないうちに会員といふ名がついてをりました。クロオバの蚊帳すきて背戸の土堤草真青きに我目つめたたく醒めにけるかなが大そう感深く存じました。」

大正五年十一月六日、（中善寺湖の絵葉書）日光にて猿田千代子とあり「けふこゝへ来ました。快晴ではあり大勢ですから寂しいといふ感も割合少なく、楽しい旅行です。大谷の川は、いやが上にも清く満山の紅葉、まことに自然の美をほしいまゝにしてをります。私どもは明后七日にかへります。「木横（上）」は汽車中で見ました。」

大正六年五月二十八日、東茨城郡小松村猿田千代子「お葉書拝見しました。その後、御変りなくお過ごし下さうでよろこばしう存じます。おかげ様にて、私も恙なく暮らしております。此間大関さんへ参りました時『詩歌』のお話が御座いました。自分もとうから、さうは思つて居つたのですが、何分力が足りませんで躊躇して居つたのです。今度は皆様からのおすゝめですのからすぐに這入るのですけれど、只今、教場が忙はしくて困りますから来月あたりから入社いたす事に致します。御返事まで。」

大正六年十月十五日、「けふは楽しく、松原の間にて過ごしました。

多くはあなた様のお噂いたしながら。暁子 みわ子さんもお妹さんも、その他四人。都合七人。(小松原女史のところへおしかけて、はつたけをとりました。大関五郎の書)

以上が小松原暁子の新堀紅泉宛の葉書の全文であるが、他に年賀状が大正六・七、八、九年一月一日付けの四通が残されている。大正七年には新堀紅泉の妻が亡くなり、夜雨の呼びかけにより木星欄に詠題「魂よばひ」を連載、暁子もこれに答え『いはらき』大正七年二月七日の木星欄「魂よばひ」(二)その八に九首掲載している。その中から二首程引こう。

空蟬の世は常なけれしかはあれけふの便りのあまりに悲し

黙します君なりければ亡き人を思ふ嘆きの更に悼まし

紹介した葉書は、始めに夜雨門下四天王の森田麦の秋を除いた大関五郎・神戸節・新堀紅泉三人それぞれの短歌の特色を極めて端的にすつぱりと評している。誰よりも新堀紅泉の愛読者であったことが窺えるものである。雑誌『詩歌』へ入社の際があつたことも記されているが、確認した所実際には暁子は『詩歌』へは作品を発表してはいない。

葉書のこなれた文章からは、暁子の人柄と感性の鋭い表現や優しさを垣間見ることが出来るものがあり、この後の大正十年には当時の『いはらき』新聞社主筆本多文雄の懇望に両親の反対を押し切って県下初の女性記者となつて活躍することになる。小松原暁子が書いた記事文は、文語体の多い中であつて、母親譲りの豊かな感性と口語体のやわらかく分かりやすい表現は女性読者の心をしつかりと捉えた。尾上柴舟・横瀬夜雨・野口雨情・山村暮鳥・大関五郎等との交流があつた。

次に金子未佳編『小松原暁子著作集』(平成十七年十二月一日発行)

から数種転載する。

やはらかき 夢より醒めて 明け近み うつらうつらに 聞く春のあめ  
わが春着 灯のもとに 縫ひ急ぐ 深夜つめたき 紅絹の手ざはり  
那珂川の ゆたにたゆたに水青き 渡しを越えて 道さらに遠し  
冬山の 小高き石の 上に立ち 見ればあををあを 筑波はるけし  
高鈴の 青き山脈 越して吐く 鉦の煙りの 白くなびけり  
女性としての感性と地域性があり、自然豊かな雄大な作品も多い。

新聞社退職後は郷里の教育委員や婦人会長を歴任し、昭和三十五(一九六〇)年常北町議會議員に女性として初めて当選、町政に貢献した。再選二年目の昭和四十一(一九六六)年四月、婦人学級バレーボール大会帰宅後心筋梗塞のため倒れ、七十六歳で亡くなった。男女共同参画社会の先駆的な存在で「男の人でも敵わない」と言われた程、身を尽くし地域のために働いた功績には大きなものがあり、文学的な面に於いても再評価の気運が高まりつつある。

#### IV、親友大関五郎からの書簡

昭和になってからの大関五郎の新堀紅泉宛書簡の数は少なく、現在六通の封書を確認することが出来る。封書の宛名は総て新堀紅泉の本名である「昌」となっている。新堀宛ての最後の書簡は、新堀自身が回想の中で引用転載しているので、そちらを参照したい。

昭和十一年三月三十日、茨城県鹿島郡巴村菅野谷 新堀町昌様 東京市中野区鷲宮二の七八八 新日本民謡社 大関五郎 「お手紙なつかしく拝見しました。御無沙汰で嬉しい。仰越のこと、承知、行きたひとおもひます。否、四月中はどうにも出かけかねます。実は御存知の『新日本民謡』を二月号限り廃刊、発行所と手を切つて乗るか、なるか、小生の手で一切合財やることにしました。二三日はゆつくり閉日を楽しみたいとおもひます。やよひさんの女房ぶり、おもつただけでも夢のやうな気がします。小さい人たちは御丈夫ですか。小生の方、上の子は私からはなれましたが、あとのがまた女の子で、乳がちつともないのでミルクです。二人とも丈夫で育つてゐるのは有がたいことです。長男は小学校二年生になりました。乙は二つの成績ですから、まあ、なんとかものになりませう。あらゆる意味に於いて、小生いよ／＼頑張らねばなりません。二十年若返つたので改めています。お手紙の、学校の話は、希望されるところを、お開の折におきかせ下さい。低学年、高学年等の区別も。さうして頂くと、私の心の準備に都合ですし、少しでも話甲斐のあることにしたいとおもひます。新雑誌は『芸術民謡』と命名、五月

一日創刊の手筈にて、目下、その準備に忙殺されています。かうした事情のため、四月中は全く寸暇もないこととおもひますから、創刊号を出した後は、手順もつきますから、五月上旬から中旬の間に出かけたいとおもひます。久しぶりで、菅野谷の風に吹かれて、今年は随分長い寒さでしたが、やうやく春めいてきました。今日の鶯客は、烈爪で埃を吸ひあげています。何処からとなく聞える鶏のこえをさきながら、御健在を祈ります。皆様へ宜敷。三月三十日 大関生 新堀大兄」

四月二十八日、住所等は前に同じ「前略 かねてお約束のことは、小生五月十五日に東京出發、同日お宅へ直行します。翌十六日(土曜日)に講話をする順序にしたいとおもひます。然るべくお取計らひ下さい。十七日には、早朝水戸へ向かひ、同日午後からの「彗星文芸小集(常総新聞主催)」に出席、同夜水戸に一泊、十八日に帰京することに決定しました。久しぶりでお会い出来るので楽しみです。貴兄も、水戸の会へお出になりませんか。前田君にも会えれば会いたい。どうしても時間の都合がつかず、菅野谷であまりゆつくり出来ないのが残念ですが、小生のお邪魔する頃は、あのお庭の花も淡々と迎へてくれるでせう。あかるい陽の下で、杉の大樹を仰ぎたい。小生目下、新雑誌創刊の仕事に忙殺されています。近日中お手許にもお届け出来ます。萬て拝眉の上。皆様へよろしくお伝へ下さい。句々 四月二十八日 五郎生 新堀兄」

五月五日、住所等は前に同じ「お葉書拝見いたしました。それでは水戸の会の方を先にします。これは、すでに日時決定後ですから、(十七日午後一時より弘道館でやることにせりました)そちらの事の日取りを、十九日に講話をする段取に変更いたします。しかるべくお取計

らひ下さいまし。小生は、十七日早朝東京出発、同日「彗星小集」後、水戸に一泊、翌十八日に墓参をすませて、午後の車で、そちらへ向ひたいとおもひます。もし、その日、午後の車に乗りあひかねるやうな場合は、十九日の一番早い車でまいることにします。気が張つてるところで、一気にやつてしまひたい希望です。念のため申添へます。以上の順序で小生の帰京は、二十一日いつぱいにはどうしても帰つて来ねばなりません。何しろ雑誌の仕事が山積して、それ以上は何とも時間のやりくりがつきません。これまた、あしからずおふくみ下さい。講演は、一校一時間程度と御承知下さい。長くなると、子供たちの飽きのくるのが困ることです。三校となるとその分で、すべてに好都合とおもはれます。おふくみ下さい。そちらの御都合で、十九、二十両日に分けてもいいとおもひますが、なるべく水戸の会に、貴兄も御都合で是非、お出掛下さい。久しぶりで、一緒に歩いてみたいし、山村氏の遺族や、如夢さんにも会つて話したい。おめにかかつて万々。取急ぎ御返事まで。

五月五日 大関生 新堀兄

昭和十三年十月十四日、宛名は前に同じ、東京九段 軍人会館にて大関五郎「秋深くなりました。ますく御元氣におつとめの事とおもつています。静かな秋雨のなかにはらくと落ちる栗、菅野谷のゆく秋ををしむ虫のこえ、是を想ふ小生の心はそれからそれへとなつかしさでいつぱいです。その後、時々思ひ出してはお噂をしたりしていたのですが、浪人ぐらしに病弱な小さい子供たちを抱へてのあけくれは、筆をとることも進みませんでした。いつかお便りを頂いた時にも失礼しました。あしからず。今日の小生は、勤める身の事務机にこのペンを走らせてい

ます。この事はもつと早く貴兄にお知らせするつもりでいたのですが、何しろ就任以後何彼と多忙つづきのため延引しました。銃後の第一線に大活躍をすべく頑張つています。そのうちにそちらの方へ出張するやうなこともあるのでせうし、貴兄にも農村のことなどを執筆して頂きたひと想つています。元氣にく前進また前進です。小生のこの腕に期待して下さい。来春の梅の頃には是非水戸へ出かけたかと思つています。その時、風のたよりで聞けば桃弥が芸妓屋を開業したそうですが、ほんとはですか。あれの事だからきつと頑張つてゆくことせう。お会ひになりましたら、よろしくおつたへ下さい。いつ思ひ出してもなつかしい女です。体を大切にして長生きしろと仰有つて下さひ。今度の靖国神社の大祭には御上京になりませんか。もし御上京なさるのでしたら、小生と会ふ日を一日こしらへておいて下さい。今月は二十三日以外はいつでもお会ひできます。十九日には休みになりますから、その日だと好都合ですが、他の日でも大丈夫です。詳しいことは改めて御打合せしませう。会館の方へお訪ね下さる場合は編輯部と仰有て下されば、すぐわかります。久しぶりで乾杯しませう。では、どうぞ御元氣で。奥様はじめ、みなく様にくれぐれもよろしくおつたへ下さい。十月十四日 大関生 新堀様

十一月十日、茨城県鹿島郡巴村菅野谷 新堀昌様 東京市麴町九段一丁目五番地 財団法人 軍人会館編輯室 大関五郎「今日は嬉しかつたが、後は大いにぼかんとしました。この次ぎには、ゆつくり話せる予定をこしらへて来て下さい。心待ちしています。今日一寸話した運動はみつしりとやつて下さい。水戸でも動き出すやうに湖雨影君によく話して

下さい。彼にもまつたく久しく会わないから、東京へ出たら、会館に立寄つて欲しいといつていたとお伝へ下さい。来春、梅の時に、旧木屋の人々の集まりを是非やらうではありませんか。小生は萬障繰合せて出席しますから、貴兄や前田君の手で万事進行させて下さい。夜雨先生と如夢さんの追憶を兼ねての集りは、意義尠なからずと思ひます。今度会つた時によく相談するつもりですが、忘れないうちに書いておきます。内田美和君に大いに児童作品を頑張れとお伝へ下さい。呑平先生も元気なのでせうね。きくのを忘れました。児童作品の種類は綴方、書方、画、童謡、短歌、俳句等ですから、予選してどしどし送つてくれるやうにお話下さい。いますぐ間に合へば新年号にくり合せて載せたいと思つています。なんとしても今日は残念でした。朝では乾杯するわけにもゆかず。呵々。議員諸氏一行の宿は、会館の宿泊部にしたらいかが。といふたとして、宿引きになつたわけではなし。いろ／＼に便利ではないかと思ふ次第なり。お互に元気で逢へて愉快でした。ではまたの逢瀬を楽しみに。十一月十日 夕九段にて 大関生 新堀兄一

以上が昭和になつてからの大関五郎からの書簡の紹介であるが、昭和二年五月二日、大洗子ノ日原の松林の中で暮鳥の詩碑の除幕式が行われ、新堀はこれに誰よりも喜んで参列したといわれる。この詩碑建立の発起は大正十五年三月であり、高井能、柳橋好雄、大関五郎が中心となつて進めてきたが、いざ石材店にお金の支払いとなつた時に支払額が不足してしまつた。建設委員であつた大関と柳橋の二人は、新堀に電報為替で金百円の送金を依頼した。大金百円は簡単に出せるような金額ではな

かつたであろうが、窮状を知つた新堀は見捨て、置く訳にもいかず送金した。そしてこの事は誰にも語ることはなく、詩碑は立派に建つた。この新堀の尊い友情に敬意を表したい。表面的な友人との付き合いを遙かに越えたものであることに感銘を受けた。

最後に新堀紅泉の大関五郎への回想文を掲載したい。この回想文には、大関五郎の新堀紅泉宛ての最後となつた昭和二十一年三月二十三日消印の書簡が紹介されている。回想は「大関五郎君を憶ふ」〔茨城隨筆〕二卷二号 昭和二十四年三月一日と題され、二人の温かい友情を披歴され、真の友情を育まれており、心の友であつた一端を垣間見ることが出来る。

大関君、君はどう／＼この世を去つてしまつたのか。無常迅速の世とは云へ永い間の交友であつた君の、厳肅なる死といふ事実の前に直面して私は余りにもはかなく悲しくなつてしまふのだ。

私が君と初めて相知つたのは三十年以上も前のことだつた。それは地方に於ける「木星」と中央に於ける「詩歌」とが仲立ちとなつて結ばれた縁であつた。加ふるに山村暮鳥氏を中心とする「苦惱者」などが出て鳥見町の君の家にはいつも県下の文学青年が集まつて恰も梁山伯の感を呈した。或るいは詩を論じ歌を語り或るいは呑み且つ騒いだ。当時二十代の血の燃え立つ青年達のかうしたグループが如何に元気で愉快なものであつたかといふまでもない事であつた。思い出の糸を手繰ればそれからそれと限りもなくつゞくであらう。

さうかうしてゐるうちに君の心境は変化した。水戸を引き払つて東京

へ出て行くことになつたのだつた。内心大いに野心があつたのであらう。去るものは日々に疎し、それ以来音信も絶えく／＼になり勝ちだつたがお互いの胸の中にはいつまでたつても心と心が通つてゐた。二年も三年もたつてからひよつこり手紙が来たり亦こちらからもやつたりした。或る時はふらつとはる／＼東京から風の如くやつて来たこともあつた。こちらからも亦序ではあるが突如として訪ねて行つたこともあつた。そして昔がたりに花を咲かせることが常であつた。日本が太平洋戦争にまで突入して空襲がはげしくなつて来た時（終戦六か月前頃）私は心配になり出して鶯宮宛に手紙を出した所が付箋が付いて戻つて来てしまつた。私は何處かへ疎開でもしたかそれ共どうしたことだらうと思つてゐた。聽て終戦となり世の中がごたつてゐる最中（二十一年三月）宮城県の松山町といふ處から長い手紙がひよつこり届いて来た。

どうしていらつしやるかといつも思ひ出し乍永いことご無沙汰しました。みちのくにも春が来てといつても昨日は雨今日は朝から雪が降つてゐました。いまはからりと晴れて雨だれの音がしきりです。小生はこの町に来て二度目の春を迎へました。終戦前年の暮まで東京で頑張つたのでしたが何しろ子供たちが小さいのでその頃は乳呑児もありましたので疎開したのです。この町へ来たのは終戦の年の秋の終りでした。いや戦争では本当にとんだ目にあひました。いまの仕事は同封の名刺で御想像下さい。全く百八十度の転換です。しかし習ふより慣れるとはよくいつたもので此頃ではどうやら切り廻りしてゐます。宮城県の瓦では質からいつても量からいつても当地が一番です。今は進駐軍宿舎用のものの

製造で手が廻りかねる有様です。仙台もよく／＼やられました着々と復興しつゝあります。仙台へは殆ど一日おき位には出て居ます。この町より約一時間ですがいまは汽車がひどく混むので閉口です。

この春から東京の方へ帰つて或る出版社に招かれて、そこで社長の補佐役をつとめるわけでしたが準備をしてゐるうちに紙き、んにあつてしまつたので、目下の所新規計画は見透しがつかず今年一杯はこちらの方の仕事をしてゐることに決めました。

当地は仙台から汽車で度々出ますからその点は便利です。松島は丁度中頃にあります。小生が当地に在住中に夏にでも一度都合をつけて御来遊いかゞですか。第二工場が気仙沼にあるので時々出かけます。新月といふ駅を通る度に熊谷武雄の

叔母がため春の彼岸の菩提寺の鐘を一つき我つきにけり

などを思ひ出します。熊谷君も亡き人の数に入つた様です。近頃当地の雑誌を見てゐてそれを知りました。みんな昔の夢となりましたね。去年の十一月に一才東京へいきました。その時、水戸の篠原宅に一泊しました。その時に貴兄のお噂をしました。篠原の小父も中風で寝たり起きたりしてゐるとのことでした。小生のこともわかつたのやらわからぬのやら……人生の侘しさが沁々と感じられました。墓参の途次水戸の街を歩いてみました。が変わり果てた姿には呆然たるばかりでした。時間がかつたので山村未亡人などの消息を知ること出来ずに水戸を立ちました。いつか暇を得られる時が来ましたら水戸から貴兄の里へも久々で訪れたいと思つてゐます。希はくばつ、ぢの咲く頃にと思ひます。あの

頃の思ひ出はいつまでもいつまでもなつかしい。山村未亡人の消息を御存知でしたらいつかお聞かせ下さい。あの頃の人では東京に松村又一君が元気でゐます。あの人はレコードの歌詞の作家として一家をなしました。現在はキングレコードの専属として活躍といつてもいまは会社の方がヘコタれてゐるのでパツとしませんかとに角元気でやつてゐます。

そちらの方は食料問題はどうですか。こちらは穀倉といはれる處ですが去年の夏は飢ゑ死の一步手前までいきました。今年はいまの所毎日白米を食べてゐます。何しろ物価のせり上る現実には閉口くです。イモがステキにまづい土地なので常陸千葉のイモの味を偲んで話しの種にしてゐます。カンソウイモなども従つてうまいものはありません。しかし馬鈴薯はなか／＼上等ですが今は米の値段よりも高い始末です。水戸の前田徳ちやんはどうしてゐますか、今度の選挙では大いにハゲアタマを光らせてゐることであらうと想像してはゐますが。水戸も変わった。世の中もがらりと変わった。けれど貴兄と小生の心はちつとも変わらなと信じてゐます。いつかゆつくりと会へる日がきてしみ／＼と話したいものです。どうぞお体をお大切にお過ごし下さい。皆様へ呉々も宜しく願ひます。

三月二十二日

大関五郎

新堀昌兄

大関君、私はこの事こまかな友情のこもつた手紙を見てどんなに悦ん

だことか。私の處などでは農村に住み幾分田畑も耕作してゐてさへ大麥飯に甘藷の千切を混ぜた賄であつた当時、食料に大した心配のないといふ消息は何よりも先づ私を安心せしめた。世の中はがらりと変わったが貴兄と小生との心はちつとも変わらないと信じてゐるといふこの友情は何とも言へぬうれしさであつた。私もこまごまと近況を知らせて、つ、ぢのさく頃は非来て呉れる様と言つてやつたのだつた。そして来る時には前に一寸知らせて呉れ、ば駅迄出てゐる。あの長い巴川の堤防をブラリ／＼語り乍ら歩くのも亦一興であらうとつけたしたのだつた。それはこの前来た時、帰りに駅迄送りよもぎが萌え、つくしが角を出してゐる堤防を春風に吹かれつ、楽しく語り乍歩いた記憶が新しく甦つてゐたからであつた。だが君はつ、ぢが咲いても来なかつた。散つてしまつても来なかつた。若しかししたら墓参乍お盆の頃でもふらつてやつて来るかなと思つても見たが遂に姿は見せなかつた。其翌年やがてつ、ぢが咲こうとする頃、亦葉書を出して見たが返事がなかつた。私もそれつ切り遂音信を絶つてしまつた。が心の中ではいつか亦ひよこりと気まぐれの様手紙が来るだらう。そして又逢へる日が来るだらうと今日の今まで思つてゐた。けれど一切の望は失われてしまつた。新月の駅にか、つては、かつて「詩歌」の同人であつた熊谷武雄君を偲び、その死を悼んだ君は、今は自ら無き人の数に入つてしまつたのだ。あ、この世で今一度逢つて見たかつた。そして心ゆくまで語つて見たかつた。

大関君、人間のはかなさ、君が去年の十一月から病の床に倒れてゐるとは神ならぬ身の露ほど知らなかつた。若しそれを知ることが出来たなら、はる／＼みちのくの松山町にて君の病を見舞つてやりたかつた。

若しそれが何かの事情で出来なかつたかも知れぬとしても手紙で慰めてやる位のこととは出来たらうにと遂愚痴も出るのだ。だが奥さんの手紙で見ると「死ぬ一ヶ月位前手紙も住所録も清書した原稿も写真も、おしまひにはいのちよりも大事だといつてゐた新日本民謡もみんな破いて燃やしてしまつた」といふではないか。身も魂も亡んで行くに当たつてはこの世の一切のものを否定つくさうとしたのか般若心経が説く色即是空空即是色と一切を無とする空觀に徹しようとしたのか否否元來策もなく智謀もなく生まれたまゝの自然児、悲しければ泣き、楽しければ笑ふより外に知らなかつた君にそんな悟りめいたことは持合わせなかつたであらう。秋風落莫聽ては身も世界も一切を掩ひつくさうと暗黒のとばりがひたくと浪の寄するが如迫り来る人生のたそがれが只々寂しく悲しかつたにちがひない。「昨年十月一日床について以来十一ヶ月、たよりのない私一人の手にすがつて訪ふ人もないあけくれを昔ばかり恋しがつてはひとりでしく／＼泣いてゐました」といふ奥さんの手紙を見ると私はたまらなく可哀想になつて涙がはふり落つるばかりなのだ。

だが君の寂しがり家は今度が初めてのことではなかつた。恐らくは生まれ乍の寂しさの持主であつたらう。その処女歌集に「寂しく生きて」と題したのを見てもそれを裏書してゐることが知れる。生まれて間もなく父を失ひ次いで産みの母とも生きて別れねばならなかつた運命は実に生まれ乍らの寂しさの持主ならざるを得なかつたのであらう。

大関君、君に芸術技巧のたくみさはなかつた。絢爛華麗は元より求むべくもなかつたが水晶の玉といはうか、葉末の宿る白露といはうか、水の如き淡々たる中に純の純なるものが寂光を放つて光つてゐた。私は常

にそれを愛した。今一度世に出して最後の結集ともいふべきものを見せたいと貫ひたかつたがあ、惜しいことをしてしまつた。

遮莫、大関君よ、否大関君の靈よ。未亡人や糸子さんはかたみの御子さん達を擁してこれから絵筆一本でこのけはしい生活のあらしと闘ひ抜く雄々しくも雌獅子の如く振ひ立つてゐる。私はその生活にと芸術の將來の満腔の期待をかけてゐるのだ。庶幾くば暝せられよ。

本文に引用されている書簡は昭和二十一年三月二十三日の消印があるもので、宛名は茨城県鹿島郡巴村菅野谷 新堀昌様となつており、差出人は宮城県松山町 大関五郎 日付は三月二十二日とある。封書本文共に筆書きとなつており、多少書簡本文と活字との差異も認められるが特筆するような大きな異同はない。

V、稿本概観

新堀紅泉の手造りによる稿本が六冊程残されているので、それらについて概略見て行きたい。尚、歌集『野草』と詩集『小鳥のささやき』の二編の著作については、それぞれ詳しく後半に於いて見て行くことにしたい。

歌集『雑木林』

小説『夢の香』

文集『記念集』

歌集『旅すがら』

歌集『野草』

詩集『小鳥のささやき』

歌集『雑木林』は、明治四十三年五月から大正二年六月までの作品を集めた歌集である。「灯のながれ庭木は影を地に布きぬ馬追の声の涼しき宵かな」を巻頭に置き約三百首を収録している。父の死そして姉の死更に子供の死を悼む短歌も多く収録されている。

小説『夢の香』は、明治四十四年六月に纏めたもので目次によると「白銀のピン・今昔・蟋蟀・頬白・見送り・ブチの心・孤児・日記の中より（一）・日記の中より（二）・睨めたる後」が収録されており、後書きには「貴き夢の香の後に」を天瓢謙蔵が書いている。

文集『記念集』は大正元年夏に刊行した紅泉と天瓢との二人集で二冊

限りの製本となっている。目次によると「夕陽（平原のスケッチ）・始めに・似顔絵（模写）・記念葉書（バスケット）・ペンのあと・北利根の夕（内浪逆付近スケッチ）・紅泉より・湖（廣湖岸スケッチ）・天瓢より・写し終りて」天瓢は当時の鹿島郡大谷村箕輪の教師白田子道のことであろうと推測される。文学愛好者二人による文字通りの記念の文集となったことであろう。

歌集『旅すがら』は大正元年十一月に制作された。表紙及び口絵は白田天瓢が描いている。全体を七章にわけている。「青き風」五十首は明治四十四年四月から七月まで。「馬追の声」四十首は明治四十四年九月から十一月まで。「この嘆き」十八首は明治四十四年十二月から四十五年一月まで。「惜しき若さ」四十二首は明治四十五年二月から六月まで。「淋しき初夏の天地」二十首は明治四十五年六月から七月まで。「茱萸と小鳥と柏の葉と」二十八首は大正元年七月から八月まで。「路傍の草」二十六首は大正元年九月から十月まで。後ろには「夕暮氏より」。「先輩より」（金子薫園・尾山篤二郎・前田夕暮等）からの書信文を掲載している。

歌集『野草』は大正九年六月十四日に浄写されたもので四百字原稿用紙三十七枚の最後の年月日の脇に「さつき咲く窓にて」とある。収録された短歌作品は三百六十六首を収めている。山村暮鳥に序文の依頼をしたようであるが横瀬夜雨にも何らかの相談をしたようである。大正九年一月一日消印の神戸節の新堀宛葉書に「貴兄歌集御出版の報、夜雨氏より拝承期待いたし居候。いよいよ御精進のほど祈上候。」とあることによつて推測することが出来る。前田夕暮にも序文を依頼したようである

が、結局は上梓するまでには至らなかった。

歌集『野草』には自序がある。「自分は寂しい広野に生ふる一茎の『草』である。その地上に現はるゝや風に吹かれ雨に打たれて今日に至つた。そしてこれは最後の大暴風雨に出逢つた迄の悲しい足跡である。」と記している。最後の大暴風雨とは最愛の妻の死を比喩表現を用いて表したものであろう。

この浄写された稿本にはもう一冊古い稿本が保管されている。それによると書題名は『傷める野の花』であった。巻末には「磯浜町明神町鬼坊裏 山村暮鳥」と書かれており、裏表紙には「落日に涙をながす悲しさよ人は野に出て鉄打ちふれり―紅泉生―」とある。後半約十枚程は下の方から半分位まで割かれているが、途中で思い直したのであろう紙縫りで全体を製本している。その部分は妻への悲歌の部分である。この稿本から浄写されたものと考えられる。

収録されている作品は過去から制作された作品の集大成であることが窺われ、作品はほぼ平明で実直な生活の中から生れた日常詠であるが、中でも妻との永遠の別れを歌った作品には心打たれるものがあり、紅泉短歌の一つの到達点を表すものである。

先ずは全体的に作品を見て行きたい。

窓ぎわにわが植えやりし芍薬の咲くを待たで死にし父かな  
うす青き岐阜提灯の灯のかげにほのかにうつるち、が面影  
姉にわかれ父にわかれつはたわれの若さに別れあひぬこの秋  
打ち見やる筑波は澄みてただ青し死にたる姉を思ふわが前

生前のこのかすり傷死にし子に負はしやるさへ親はかなしき

死にし子に着すべく衣温むる妻に小言のいひ様もなし

わが家に暗く小さな影一つ残して吾子の死に行きしかな

吾子のため赤き鼻緒の藁草履つくる霜夜のこの寒さはも

常陸野にわれと筑波とただふたりものがたらばや木原はるかに

姉訪へば峡の小川の水汲みて茗荷の若菜煮てくれにけり

落日に涙を流す悲しさよ人は野に出て鉄うちふれり

牛よひとり霜夜ごもりの寒からむ淋しからむと餌を置き帰る

鹿島野の木原は芽ぶき春浅しこゝにひばりは鳴きしきりたり

野の面のさざり消しつゝ、陽は出でぬ秋の出水の川波光る

日常生活の中での感慨や、父の死と姉の死そして我子みちが大正三年三月十八日に四歳で亡くなったことが心に残る作品である。短歌の制作歴についての始めについては前にも少しふれたが、明治四十三年、金子薫園主宰の短歌研究会に入り、初歩的な手ほどきの指導を受けている。その後明治四十四年『詩歌』が創刊されると共に白日社の社友となって前田夕暮に添削指導を受け、その作品を『詩歌』に発表した。一方地方に於いては、横瀬夜雨の率いる「木星」欄に於いても活躍した。そして又山村暮鳥の主宰する雑誌『苦惱者』の同人となった。若くして父を亡くしたこともあって早くから社会人として世に立った為には何時とは無しに作歌から遠ざかってしまった。終戦後昭和二十一年、再び白日社に復帰してその後も歌作は続けられた。晩年の履歴書の中の「歌歴」には「かつて歌集『野草』を出版せんと企てたることあるも或る事情に依り中止。

未だ著書なし」と自ら記している。その後が続けて「自作短歌」を五首挙げている。最後には「あうく」とつゆの晴れ間の陽の光り蝶舞ひ出て、草にたはむる」と初夏の自然界の活動的な始まりの短歌が書かれている。一時歌作は中断したか、戦後に再開し白日社の新同人となつて作歌活動を続けていた。

作歌信条としては自然と時代の中に自己を見出し、自己を養い、そこから生れた感激を歌に出すという態度で作歌していた。生前「出来得ることなら自然の中にとけ入り自己と自然と一体になりたいと思つていますが時代はそうわさせてはくれないうです。」と語つていた。

友人の前田香径は『週刊てんおん』（昭和四十年四月 五三五号）「新堀紅泉を憶う」の中で「ともあれ、新堀紅泉の名はずいぶん古くから歌人の間に知られている。私と往来するようになってからも、すでに四十年はすぎている。」と回想している。小松原暁子は、前出の大正五年七月三十日付けの「暑中御うかがひ」の葉書に「私の最も敬慕する紅泉新堀様いかがお過ごし遊ばされますか。暫く木星にお歌を拝見しませんかどうぞお見せくださいませ。私はあなたのお歌に深い深い共鳴を与へられてをります。技巧の勝つた大関さんのよりも、鋭さを持つた神戸さんのよりもすべてのものに愛を持つた、おとなしい、そして真実なお歌に牽きつけられてをります。私はけふまで、この一片の書を認めますに、いくらほど躊躇したでせう。」と紅泉の作品や当時の夜雨門下四天王それぞれの特徴を端的にすっぱりと評されている。

次に日常生活の中の妻の様子を作品化したものを見て行きたい。『詩歌』（大正六年十一月）の「身ごもる妻」には十首程掲載している。そ

の主なものは「秋深み」や「土間の隅」等が挙げられる。

たそがれのくりやに妻ははたらけりわが子をつれて豌豆をつむ子のために己が晴着を打ちほぐすとしの前の妻が横顔子を背負ひ出で行く妻がねんねこの後姿も世馴れたるかな

おしろいを好まぬ性のわが妻のみなり淋しきその後かげ世に何の望みも持たず児を育て家を守るに倦まぬわが妻

すかしてもすかしてもなほ泣ける子をしばし瞶むる妻のあはれさ身重なる妻をあはれみ豆打ちの手助けをする母はかなしも

秋日和妻と母とが稲穂こく傍に稚児のひとり遊ぶも

身ごもれる妻はさびしく裏畑に黍の穂切れり身を案じつつ年老いし母に子の世話かくる故身が細るとて妻が嘆くも

不平ある妻をかたへに病める子を抱きていぬる心もとなさ

雇女と妻はさびしく柴刈にけふも出で行くその後かげ

妻とわれと苗木を植うるかたはらに子は遊びをり青草の中ささげつみて妻は帰れり森の家に夕木もれ陽が窓に赤きに

あれこれと山家の妻が盆仕度たちはたらける甲斐々々しさよ秋の野に草かき分けて柵の実妻ととる日のうら安さはも

わが妻の洗いあげたる白菜が冬のうす日にぬれ光けり

味噌汁に野三つ葉の香をなつかしみ貧しともせぬ吾妻なるかも栗とると隣の妻にさそわれて妻も籠負ひ出づる秋の日

秋日和妻が豆打つかたはらに一人遊びの子のいぢらしさ  
 拡げたる穀豆をいざ打たんとて庭の日和に立ちし妻かも

栗の穂の籠を負ひつつ雨の中しと、にぬれて妻帰り来ぬ

専倉に麦を蒔きいる妻のかげ秋のひろ野にあはれがるかな

そちら向きいねたる妻が黒髪の子小櫛光る冬の夜

吾子のため人に後れて芽花ぬく妻が小さく見ゆる夕野路

妻病めば老のみ母がするかしき今朝は我がま、申されずけり

さかりいて春尚ほ寒むき病院にひとり病めるかわがいとし妻

子の土産買はんと出づるわが妻を見送りている旅籠の二階

草籠の上にさわさわ柏の葉のせて帰りぬ妻とはしたため

雇女をつれて出で立つわが妻とわれも田草をとりたかりけり

秋深み長夜となれば今宵より縄なひ初むる妻とはしたため

土間の隅みごもる妻はもろこしの穂を編みてをり秋雨のふる

徒らに心細がる孕み妻慰めてやる冬の夜のとこ

産気づく吾妻がため実母散霜夜のふけにひとり煮るかも

農家にとっては、妻という女性は大きな働き手の一人であることが窺える。

次に原稿用紙の巻末を二行あけて、新たな原稿用紙から始まっている作品をこ、からは全作品転載したい。

泣き狂ひ母のいまわには、を呼ぶわが子の姿見るに堪えぬや

愛ぐるし子が涙の限り声限り叫べるものを逝くか吾妻よ

これやこの一縷の望み一本の注射の針を感じなし妻

これやこのひと、き毎に冷えまざる吾妻が体守るに堪えずも

香たかれ花さしむけられある見れば妻は仏となりけるかも

かあさまは眠むれるにかと子に問はれさなりといひて胸ふさがりぬ

うへの子のしほれ顔にも次の子の頑是なさにもち、は泣かれる

銭欲しといふより早く子に銭を与へてやりぬ母のなければ

吾が妻の棺をつくる槌の音なきがらを守る室に聞こるも

昨の夜わが髪撫でし青貝の妻が小櫛は永遠にさ、れず

恐る／＼母の死顔を覗きをるわが子いぢらし泣かじとすれど

今日よりは母なし子とはなりにけるこのはらからを抱きやらし

天地にたつた一人の汝が母は永遠に帰らずいか、すべきぞ

外に出ればよべに変わらぬ星月夜いつくにあるやなき妻が魂

更け渡るしじまの中に真鍮の仏具が光る通夜の夜半かな

せめてもの心やりにとなきがらに枕並べていねにけるかも

葬式の米を出さんと倉に入り計る者なき悲しさの涌く

せき来る涙かみしめ人の前笑顔つくるこ、ろ切なさ

今日よりは墓場の人となる妻が逝くにひとりはさびしかるべし

子には汝が愛迄かけて愛すべし心おきなく逝きね吾妻よ

来る日のいつかはわれも逝くものをしばらく忍べひとりなりとも

しばらくは世の雑音に耳ふたぎただ思ひ居む亡き妻のこと

つゆそむく心なかりし妻故に死なれて更にいとしさのます

朝床に涙流しているち、を子は悲しげにみまもりにけり

亡き妻をひとり思ふに堪えやらで悲しきことを児に言ひにけり

今ころは母はどうしておはさんと夜のいろりべに言ひ出づる吾子

子には子のち、にはち、の悲しみをもちつ、妻が喪にこもりをり

難遊びするはらからのかたはらに日向ほこして妻偲びをり

みだれ髪けさはおほばに結はれをり母のなければそれも悲しき

遊びかねまたしくくと泣き出づる子が声悲し夕寒の庭

思出の子の日が原を菩提寺に妻甲ふとけふはよぎるも―大関五郎君へ―

暖かく春は来つれどわが好む野三つ葉をつむ人はあらなく

過ぎし日を妻と植えにし杉苗のはつ／＼青し春の朝山

春の日に生命あかるき頬白のなりはひ見つ、心さぶしも

ひともとの松の苗木に黒土を寄せつ、思ふ亡き妻のこと

ははのなきこのはらからのあはれさにはてなくも涌く父の慈悲心

妻が墓詣づる朝を先に立ちてわが子が歩む夏の畑道

おとなしくち、につき来ていぬる子かい抱く夜床さびしかりけり

悲しみをわが身一つにおさめつ、新盃蘭盆の夜の淋しき

霊乗せて来るとしいへば盆綱の童子が声もなつかしまる、

汝が性に似て淋しがるみそ萩を供へて汝が霊祭する

亡き妻が植えておきたる茗荷畑茗荷の花の匂ふ淋しき

茗荷畑秋の夕べの静けさに亡き妻が顔うつ、なるかも

午後の陽に赤くさびしきさやさ、げ墓場に通る畦に実るも

ふまれつ、さつまの蔓は畦道に這へひるごりて秋となれりけり

さやさ、げほせし蓆の片隅に猫いねぶれる庭の秋かな

裏窓の土手の草間に灰白く野菊が一つ咲きし初秋

風祭りするとてうつか野を遠く太鼓の鳴りの響く秋晴れ

夕庭を走るわが子の後がけ丈夫になれと見ていたりけり

友仙の形付紅きおのが影宿の鏡にうつす吾子かな ―二女手首の関節

をはずして接骨医に行く以下二首

結たての子が髪かざる幅広のりぼんが赤し朝の姿見

かりそめの一夜の宿の女さへ子にやさしきがうれしかりけり

裏山に朝々栗の実の落ちて子が朝起となれるこのごろ

夜の酒味こそよけれたらちねの母がつくりし菊の酢物に

裏山の木の間に鳥の影さして秋は親しき日となりけり

以上が歌集『野草』の後半部分であるが、実はこの部分について現在までに確認することが出来た大正七年の『いはらき』新聞は、茨城県立図書館のマイクロフィルムに一月は無く、二月は六日、七日、二十三日のみがありその後は四月となつてしまひ現在未確認の状態にある。全体的には未だ把握はしていないが、引用した短歌は大正七年の新聞『いはらき』の「木屋」欄に一月下旬に五回に亘つて掲載された「悲歌」九十数首の短歌と重なるものがあり、又除かれたものもあると推測される。例えば「裏赤き妻が下着を身につけて寒さをしのぐ春浅ければ」等がそうであるが、今は亡き妻を慕い官能的な要素も含まれるであろう。妻を亡くした者に季節が巡り来て、着物の交換とか衣類の出し入れのわびしさはどうしようもないものがありつらいものがあるろう。

新堀紅泉の妻が亡くなったのは「木屋」記念集会の二日後の一月九日のことであつた。前途した友人からの葉書等によつてもその様子や悲しみが窺われよう。横瀬夜雨は森田麦の秋宛の葉書に「新堀氏令室哀悼の歌十首ほどいただき度存上候」（『森田麦の秋作品集』龍文ブックス）とあるように夜雨の呼びかけによつて「魂よばひ」の題で数回に亘つて友

人達の短歌が『いはらき』新聞に掲載された。現在まで確認できたものは、二月六日「木星」の「魂よばひ(一)」には、その一が大関五郎、その二が山本孝、その三が佐治斎一、その四が磯山松男、その五は栗原真平、その六は佐藤博で、七日には「魂よばひ(二)」が掲載され、その七が森田亀之介、その八が小松原暁子、その九が横瀬滝子がそれぞれ哀悼の短歌を作っている。

「葬式の米を出さんと倉に入り計る者なき悲しさの涌く」は『いはらき』新聞の「悲歌」初出では「計るものなき」と平仮名表記であった。この短歌の成立状況について詩集『小鳥のささやき』の「むくろを横たへて」では「お米を」と言われて自分は始めて私は気がついた。否でも応ではこのなきがらを横たへおいて、自分は葬式の準備にとりか、らねばならないのだ。あ、このなつかしい肉体をあの暗い冷たい穴の中に埋めてしまおう仕度を。自分は涙をふるつてよろ／＼と立ちあがり、鍵を握つて倉の扉を開けた。倉の中はうす暗かつてない陰惨の気に満たされている。入つて見たが、何処へ糶を置き何処へ梗を置き粟をおくかわからなかつた。そして何人の人数でいくら程の米を興へて好いのか、人は扉口に待つているのに、私は狂ひかけた頭を悩みまして徒らに移すばかりだ。悲しい記憶は忽ち胸に涌いた。飯料をいくら残してあとに今年の売穀がいくらあると、二人で語り合つたのは遂先頃、而かもこの穀倉の中の自分分が立っているほとりだ。あ、その時動かした彼女の唇からは、最も幽かな息も通はなくなり、その輝いた瞳は永遠につむつてしまった。その上彼女がなすべき凡をの心配迄、今日からおれの一身にか、つている。」と散文詩に書き嘆き悲しむ。

妻に頼りきっていた生活、その妻が亡くなってしまった後の悲しみと思い出を妻の葬儀の準備に囚らずも感じてしまった淋しさを表現したものであった。

新堀家仏壇の位牌によると「大正七年一月九日妻つき」とあり、同日に「十カ月胎児男」とある。当時は普通であった自宅での出産の後母子共に亡くなってしまった。医者も遠く近所の手伝いの女性たちは廊下に赤子を置き、懸命に母親を助けようとしたが叶わなかった。

『詩歌』の「悲歌」(大正七年三月)と同じく「妻を懐ふ歌」(大正七年四月)に掲載された作品の中で『野草』の後半部分に収録されていない作品に「背戸出て、霜夜の冴えにおびえつ、裏竹藪のさ、鳴くを聞く」があり、推敲されたものには「葬式の米出さんと倉に入り舂をさがすがかなしかりけり」がある。「来る日のいつかはわれもゆくものをしばらく忍べひとりなりとも」の下には(人知れず妻が棺に書き贈れる歌)とある。「妻を懐ふ歌」から『野草』に収録されていない作品には「慰めの人の言葉も聞くが憂しひとり思ふにしからざりにけり」と前述した「裏紅き妻が下着を身につけて寒むきを凌ぐ春浅ければ」がある。

詩集『小鳥のさ、やき』は新堀紅泉唯一の詩集と云える。収録されている作品は二十四編。「むくろを横たへて」「悲しみの中の悲しみ」「春の朝山」「榎林の夕べ」「永久に眠れ」「冬木」「期待」「小鳥」「黎明」「自分の巢」「健康に」「こほろぎ」「妻の言葉」「初秋の空」「忘れていた自分の畑」「葬」「紀念」「人間の心」「弟に贈る詩」「春」「お祖父さん」「無題」(妻よ何でそんなに悲しむのか)「牧者に贈る詩」「自分に言ふ」である。詩集の書題名となった小鳥が登場する作品については「小鳥」が挙げ

られる。

小鳥

裏山の榛の葉が

黄いろく染る頃を

今年も来る秋の小鳥

どこをどう廻つて来たのか

山を越え川を越えて

遠くの国からやつて来た渡り鳥

或る時は

冷えくくと朝の空気のまつはる

杉木立の中に

ひつそりと忍んで餌を食んでいる

時折足でけ落とされた

からつぼの松の実の笠が

地上にかすかな音を立てる時

そつと天井をふり仰いで見ると

お前がいるのだ

或る時は

思につかれた私が悩む窓先

こんもりとした蜜葉の日面に

その匂と黒との

斑な羽子をひるがへし

声を限りに鳴いている

その日くくに

腹が満たれば心足り

全身の力を挙げて

踊り且つ唄ふ

嘗つて貯ふことを知らぬ美しさ！

お、友よ！

わが里住みの孤独を慰むる

唯一の慰安者

踊れ唄へ

しばしわが森の上に

自然に囲まれた生活の中で、ともすると単調に流れやすい日常ではあるが、季節が巡り来る度に又自然の中の生き物たちと出会いがある。燕は一般的に渡り鳥として知られ、日本には初夏に来て秋に帰っていく。代表的な益鳥。家の玄関入り口の天井に巣を作り子供たちを育てる。その様子が親しみをもつて描かれている。作者の優しさや寂しさが窺われる作品である。書題名となった『小鳥のさゝやき』は作者自身を擬人化―同化したものであると考えられる。

「むくろを横たへて」「悲しみの中の悲しみ」の二編は散文詩である。作品全体としては、妻を亡くした者の悲しみ、思い出、慰め、あきらめをまとめたものである。妻の死の悲しみへの決別となった作品が次の詩

「永久に眠れ」であった。この悲しみからの離脱を促したのが山村暮鳥の随想集『小さな穀倉より』（大正六年九月）であった。散文詩「悲しみの中の悲しみ」の中で紅泉は次のように書いている。「夜はあかりを消し目をつぶつても、心は益々冴えてまんぢりともせず、涙は滝の如く頬を伝つて、枕紙をびつしよりさせる。かうした日が十日ばかり続いた。その朝、自分はいつとなく『小さな穀倉より』に読みふけてゐた。果然。胸にひらめいた悲しみがある。妻を忘れかけた第一歩ではあるまいかと」ある。本の扉には「この書を獄中の友におくる」と書かれ、巻頭には暮鳥の生い立ちである「反面自伝」を掲げている。多くの部分は暮鳥の人生観や芸術観を述べているが、紅泉がどの部分を読み、そこから急に思い立ったのかについては推測することは出来ないが『小さな穀倉より』は妻の死の悲嘆に打ちひしがれていた紅泉を奮い立たせ、強く生きていくことを決心させてくれた。

#### 永久に眠れ

自己の生活に一大破綻が生じた。

―妻は永遠にこの世からとり去られてしまったのだ。

失神した自分、とり乱した自分は、何事も手につかず夜はまんぢりともせず、

くら闇の中にとめどもなくあふる、涙。

朝起きては歌を両手にか、へてとろりととなり、新しく／＼泉の様に湧いて来る

悲しみにやがては心臓の痛みをおぼえる。

満々と堪えられた深潭に俄然一大空洞が生じたのだ。波瀾、怒涛、渦、―あらゆる動揺がそこに起こつた。

あ、その空洞。

それをうずめるものは何であるか、―自己だ。自己の力だ。

明くれば新春の悦びと共に米寿を祝はんとして、待ち構へていた祖父をして

千行の紅涙を絞らしめ、双鬢霜白き母をして左右に幼児を携へて悲嘆の涙に

くれしめ、かくていつまである自分だ。

起たう。涙をふるつて起たう。

妻よさらばねむれ。俺はお前が唯一のわすれがたみのため、はた母のため、

祖父のため、皆が愛と力とを贏ち得て再び世の闘に参せんに。

さらば妻よ！永久にねむれ、而して安かれ。

「永久に眠れ」によつて悲しみから脱却して―悲しみを乗り越え、淋しさをかみしめ、生きて行こうとする決心が表れ、追悼の思いが湧き、ここに至つて初めて本当の自分の孤独を生き、人生を開こうとしている意欲が表現されている。そして「忘れていた自分の畑」へと連なつて行くことになる。

忘れていた自分の畑

自分は自分の畑を忘れていた

どこをどううつろつき廻っていたものか

自分ながら呆れたものだ

今気が付いて戻つて見れば

お、この荒れ様は

せいを埋めるばかりの雑草が

初秋の空をさして

生ひ繁り

まさに実を結ぼうとしてなつてはいかに

何をぼんやり立っている

早く

早く

一刻も早くだ

その実が地上にこぼれぬうち

鋭利な鎌でかりとる事だ

そして再び掘り返し

新しき穀物の種を

蒔かねばならぬ

大正八年初秋作

亡くなった妻のことを忘れることは出来ないではあるが、いつまで

もそのような悲しみにしたりふけている事は出来ない。少しでも前向

きな生き方をと自分自身に暗示しながら生きて行こうとする作者の気持  
が窺われる。

自分の巢

夜半

吸はる、様に急いで帰って来たわが家

声かけながら雨戸を練つてはいれば

寂しくともらんぶ

静かに垂る、青蚊帳

蚊帳の中には

枕を並べて休んだ子供等の傍らに

自分の帰りを心に待ちつ、

まだ襦袢のまゝ、でいつか眠りに落ちてゐた妻

「休んでをすみません」と

疲れきつた体を半ば起こした

眠むさの中にあふる、悦び

すやく／＼ねいる二人の子供をゆりおこし

私は懐から一包みの菓子を与えた

あ、尊いこれが自分の巢だ

妻もお前もゆつくり襦袢をはづし

帯をほどこ

さらばみんなで安らかにねむらう

『苦惱者』（大正八年十二月）十三号に発表された紅泉の初期の詩である。暮鳥は十二月十六日付けの葉書で「苦惱者のあなたの詩をよんで自分には泣きましたししみとあなた達のおくつてゐる日々がおもわれます。歌集の『野草』はどんなはこびになつてゐるのです。」とある。妻つきは大正七年一月九日に病気で亡くなつてしまつた。過去を懐かしみ、今は亡き妻を思慕する気持ち素直に作品化されている。葉書には歌集とあり、暮鳥に序を依頼していたが出版には至つてはいないことは前にも述べたことである。

### 春

日陰には雪が残つているが  
今朝はすつかりもう春だ  
見よ！  
樹々に滴る雫  
地上に立ち昇る水蒸気  
そこらで鶯も鳴き出しさう  
はれやかな旭の中に  
今洗濯物をひろげている妻の白手拭  
くつきり白いその中から  
こちらを顧みた瞳がにつこり笑つた

春という季節にも明るさを感じさせるが、何よりも健康的な妻の思いの詩である。

### 健康に

夕ぐれ  
素足でかけ込んで来た子供は  
今、湯につかつている自分を見つけて  
とうちゃんあたいたいもだく／＼とせがんだ  
お、よし！と  
もうひとりで裸体になつている子供を抱きあげて湯に入れた  
先ず遊びのためにふり乱した髪の毛を  
その小さなゴム櫛で撫であげ  
顔からだん／＼洗つてやらう  
お、この跳り出しさうな肉体よ  
ついさつきまで  
この手は砂を握り砂を投げていた手だ  
この足は大地を飛ぶ様に走つていた足だ  
お前は  
田舎育ちのお前の遊びは  
いつも女子らしくないあら／＼しだ  
それが結好だ  
水も浴びろ、日にもやかれろ

お前達のために

青々と森は茂り、田圃は展けている

そこに生れたお前達の幸福を忘れるな

たゞ

健康に、健康に

こほろぎ

水を流した秋の天地

かすかにそよぐ叢の中

露の命をよろこんでいるこほろぎ

こほろぎ

こほろぎこほろぎ

あ、

その声は寂びしいけれど

何といふ美しさだらう

何といふ清らかさだらう

妻よ！

私達の生活はよしはかなくとも

あの叢のこほろぎの様に――

次に詩集には収録はされてはいないが草むらの中の雲雀の巣の中の  
子供を心配した「ひばり子」を引こう。

ひばり子

あのひばり子はどうしたろ

桐の畑のあれ草に

ひとつぼつり巣をかけた

あのひばりごはどうしたろ

草とり鎌のかま先に

はつと気付いて置いて来た

あのひばりごはどうしたろ

今日は朝からしとしと

雨がふるのに野の中で

この作品は『郷土』（大正十二年五月）第六号に「ひばり子」「茄子」「ほ  
うずき」の三編が一緒に発表されたものである。「ひばり子」は、七五  
調で軽快なリズム感があり、あ音を六回も重ねることによって更に言葉  
の調子が良い。暖かみと真実性の真価が表現され、作者の優しさと清ら  
かさが窺われる。

詩集の巻末最後の作品には次の詩が書かれている。

自分に言ふ

自分よ

何にも思ひ煩ふな

名誉や栄達や財や宝や

人間が装飾した

それ等一切のものに目暗むな

お、

自分は最後まで

ち、は、から頂戴いた

この手を土にまみらし

のろまで馬鹿正直な

田舎者で

それで好いのだ

「自分に言う」は詩集『小鳥のささやき』の最後の部分に書かれた作品であった。この「自分に言ふ」と題された詩は自分へ向けた自戒の言葉―さ、やきではあるが、この詩を書かした要因の一つにはこの詩の三編前に書かれている「お祖父さん」であり、その祖父の存在に大きなものがあつたと推測される。

お祖父さん

或人からは非常にほめられたお祖父さん

或人からは非常に悪口されたお祖父さん

頑固で強情で

一度言ひ出したら矢も楯も通らなかつたお祖父さん

私達のためには実に大恩人であるお祖父さん

あなたは随分伶俐でした

あなたは随分聡明でした

けれどもあゝ、自己の生命を永遠に残すべく

一代の履歴とその成功とを

石に刻む手段より外に知らなかつた

あなたを私は悲みます

Ⅵ、校歌等の作詞

地元に残された新堀紅泉の作品には「菅野谷音頭」「巴の唄」「巴音頭」「巴校歌」等がある。

菅野谷音頭

見ませ菅野谷は  
空に聞えた  
森のかけ

巴の奥の  
森のかけ

裏をながる、  
さらさらく

長間の川は  
銀のいろ

銀のいろ

巴音頭

春は桜の  
四月はたのしい

薬師のみ堂  
花まつり

花まつり

慈悲と情は  
杉の翠の  
色かへぬ

互いに燃えて  
色かへぬ

巴の唄

同じこの世に  
生れ合わせた  
このうぶすなに  
おい等が仲よ

手と手つないで  
旅は途づれ  
行こうぢやないか  
どこまでも

あれさ見やんせ  
いつも濁らぬ  
巴の川は  
一すぢ流れ

常陸名山  
流れ出たかや  
愛宕の精が

耕地千町  
水の恵みで  
巴川  
銀一すぢの

さあさみんなで  
働けく

名さへ富田に  
建つ高どの

役場組合  
番ひ棟

引けばひかる、	夫婦のつれか
村を治むる	二はしら
さあさみんな	働けく
学区程よく	四校の配置
民主教育	四つに組む
組んではなれぬ	誠の中に
育つ蕾が	花となる
さあさみんな	働けく
昔名高い	親鸞様も
春が盛れば	血が燃えた
悟りや涼しい	真如の月の
教え伝ふる	無量寿寺
さあさみんな	働けく

大和田校校歌

長堤十里	草青く
流れも清き	巴川
大気は澄めり	北岸の
丘にそびゆる	大和田校

遠く聞ゆる	潮さいは
荒波くるう	鹿島灘
遥かに見ゆる	紫の
匂える嶺は	筑波山
心は広く	気は高く
平和の光	仰ぎつつ
学びの道に	いそしみて
いざ伸び行かん	もろ共に

「巴音頭」の全四連の構成は、第一連では産業、二連では政治、三連では教育、四連では宗教をそれぞれ表現している。二連の「番」は「つがい」と読ませる。「大和田校校歌」の元々は「巴校校歌」であった。

Ⅶ、雨情詩「鹿島離し」の書簡に見る成立背景

新堀紅泉の遺品の中に四百字詰め原稿用紙に清書された「鹿島離し」の作品が一枚だけ残っており、初めは、この作品は新堀紅泉の未定稿の作品ではないかと思われたが、調べて行く中に、野口雨情による作詩であることが判明した。野口雨情の新堀紅泉宛の書簡によると野口雨情の「鹿島離し」の制作にあたっては新堀紅泉が野口雨情との窓口となつて対応していることが明らかである。新堀紅泉が「鹿島離し」の制作に関わりを持っていたことを証明すると共にその成立の経過を辿るためにも、ここで野口雨情の新堀紅泉宛の書簡を紹介したい。

初めに『定本野口雨情全集』から「鹿島離し」を引こう。

鹿島神宮の 宮山つゝじ 花は美し 赤く咲く

幾日たつても 御手洗こそは 涌いて流れて つきはせぬ

地からはえたか 不思議なものは 世にも名高い 要石

浪逆浦から 東を見れば 鹿島神宮は 森陰に

広い神の池 水さへ澄んで 空の雲まで 影うつす

月は夜なく 砂丘の上を 鹿島灘から 出て照らす

鹿島灘から 朝日が昇る 筑波山まで夜が明ける

野口雨情の新堀紅泉宛の最初の葉書は昭和十七年四月五日の消印があり、「東京市外吉祥寺七八七 野口雨情」の発信となっている。「拝啓」このたびはお葉書ありがたく存じます。過日御村の学校へあがりまして折は、不在の由に玉わりまして、お訪ね申しませんでした。いつもおいそがしく大変に存じ上まする拝具 四月五日」とある。以下年月順に掲載したい。発信地は総て吉祥寺である。

四月十八日の封書「拝啓。其後は御無沙汰致し御変りもなく何よりに存じます。御招きにより鹿島のつつじを見物に参へりますから何日頃ゆけば宜しいか御知らせを願ひます。道のりは佐原までゆくのが宜しいか神宮線でゆくのが宜しいか同時に御知らせを願ひます。万事拝顔の上にて申上げます。拝具 四月十八日 野口雨情」

四月二十八日の葉書「拝啓。御はがき拝見致しました。来月は見頃とのお仰せですが、来月早々参へり度く存じますから、その向御関係の皆様へ御伝へを願ひます。佐原行きは承知致しました。拝具 東京市外、吉祥寺七八七 四月二十八日 野口雨情」

六月十七日の封書（速達）は、封筒のみで、便箋はない。後の手紙にある前便の可能性が高い。

六月二十二日の封書「拝啓。御葉書拝見致しました。早速ですが、作曲家が来る二十八日（日曜日）午前八時兩國発の汽車で佐原迄まへり、それから乗り合いバスで鹿島町へ行きますから、鹿島へ着くのは午後一

時頃となるでせう。

鹿島に着けば、私の泊りましたがんげ旅館へ一日か二日泊りますから宜敷御願ひ致します。作曲家は森茂八郎と申す方で、女学校の先生も二千六百年奉祝歌の作曲もし私の懇意の人です。前便にも申し上げし通り金七十円と十円合計金八十円は直接に作曲家森氏へ謝金として御支払へ下さるやう御願ひ致します。根本氏はじめ皆様へも宜敷御願ひ申し上げます。尚、御示しの御唄は大変参考になりました。拝具 六月二十二日 野口雨情 「六月二十二日の封書には別に孔版印刷された「鹿島囃し」の作詩者名と作曲家名が入った楽譜が同封されている。

六月二十七日の葉書「拝啓。只今御はがき拝見致しました。作曲家森氏に延期の件は承知しました。三十日御上京の由御待ち致します。皆様へも宜しく御伝へを御願ひ致します。 拝具 東京市外、吉祥寺七八七

六月二十六日 野口雨情 「

七月六日の葉書「拝啓。町村長会長様方が公用のため御他事の趣の御はがき只今拝見致しました。其旨、作曲家の森氏にもお伝へ致しておきます。 拝具 東京市外、吉祥寺七八七 七月五日 野口雨情」とある。

#### Ⅷ、紅泉略譜

紅泉・新堀昌は、明治二十二年八月二日、銚田市（旧巴村で前鹿島郡銚田町）菅野谷に父亀吉、母みわの長男として生れた。新堀家の祖先は吉影城主から分家し、事後与左衛門を世襲し昌は第二十六代目の当主であった。父亀吉が六十歳にして他界の為、昌は若くして十七歳で家業を継いだ。その人柄は清廉・慈悲・温厚にして勤勉に富み、大正五年には若干二十七歳にして巴村収入役に就任し、大正七年には二十九歳にして助役に就任。大正十四年には村会議員、昭和七年から同十九年までは村長に就任した。昭和三十年からは銚田町の教育委員となった。その他警防団長、茨城県農業会郡支部長、巴村農業協同組合顧問、巴川沿岸耕地整理組合理事、巴中学校及び巴第二小学校顧問等の要職を歴任し、万人讃仰の業績を残した。更に幸四郎、松壽、猛を分家させ、自らは昭和の始めに醬油醸造業を創業し、新堀家の繁栄と発展に尽力した。老後は趣味の書道に余生を託していたが昭和四十年三月二十一日に突然亡くなった。戒名は弘誓院釈正道昌嚴居士。

昭和五十九年紅泉の墓碑が歌人小野勝美の撰文によって建てられた。碑には清廉慈愛の人とあり最後に「すぎおち葉縁にふりこむやまずみのいのちかそけく吾がいくるはや」の短歌が刻まれている。

以上は現在までに確認された新堀昌男家宅に保管されていた新堀紅泉に関する資料を中心に見てきたのであるが、特に重要な稿本として残され保管されていた中でも歌集『野草』及び詩集『小鳥のささやき』は、

新堀紅泉のそれぞれの短歌や詩の時代的な背景の中での一つの側面を持つており、文学的な軌跡の中での到達点を示すものである。今後もこれ等作品集全体の活字化を進めるように努力し、新堀紅泉再評価に向けて進めて行きたいと考える。新堀紅泉の詩歌作品を多くの人々に読んでいただければ幸いである。